

協働学習プロジェクトを はじめよう

—ESD Food プロジェクトの実践から

Let's start a collaborative learning project
ESD Food Project



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

協働学習プロジェクトを はじめよう

-ESD Food プロジェクトの実践から



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコアジア文化センター

序言（はじめに）

この小冊子を手にとっていただいたことを心から感謝申し上げます。

本冊子は、平成 27 年度日本 / ユネスコパートナーシップ事業の一環で行った、国際協働学習プロジェクト「ESD Food プロジェクト」の取り組みをまとめたものです。この ESD Food プロジェクトでは、「食」をテーマに学校が位置する地域コミュニティや国、世界を持続可能な社会とするために、児童生徒の皆さんが「変化の担い手」となり活動しました。日本から 7 校、インドから 5 校のユネスコスクール加盟校および加盟検討校が参加し、2015 年 9 月から 2016 年 1 月末まで活動が行われました。

ESD Food プロジェクトは食べ物を作ることを目指したプロジェクトではありません。学習者である児童生徒の皆さんが「食」をテーマに、持続可能な社会をつくる「変化の担い手」として教室の中だけでなく、地域、他地域、海外の仲間と学びを深めていくプロジェクトです。このプロジェクトの特徴の一つに、教室内だけの学びだけでなく、地域、他地域の学校、海外の学校との協働を通して、学び、行動するということがあります。学校や地域等の枠を超えて交流、協働することで、多様な価値観について理解したうえで意思決定することや多様な文化や考え方があることを知ってほしいという願いがあります。

5 か月という短い期間のプロジェクトでしたが、各参加校の児童生徒は関心のあるトピックを自分たちで決め、そのトピックに基づき、さま

ざまな活動を展開してきました。地域、国内外の他校と連携、交流する意味、楽しさが伝わるようにこの報告書を作りました。多くの学校で学びの輪が地域、国を超えて広がっていくときに、参考になれば幸いです。ESD Food プロジェクトは国際協働学習プロジェクトですが、国内の学校同士の交流促進につながることも意識しています。この制作物が教室の中から教室の外、学校の外、地域の外にも学びの輪が広がるきっかけとなればユネスコスクール事務局としても嬉しいです。

最後に、事例を共有してくださった ESD Food プロジェクト参加校の先生、児童生徒の皆さん、このプロジェクトをご指導いただいた日本ユネスコ協会連盟事務局長の川上千春様、聖心女子大学文学部教育学科永田佳之教授、インドのコーディネーターを務めてくれた Centre for Environmental Education (CEE / 環境教育センター) の Padma S. Iyer 様にお礼を申し上げます。

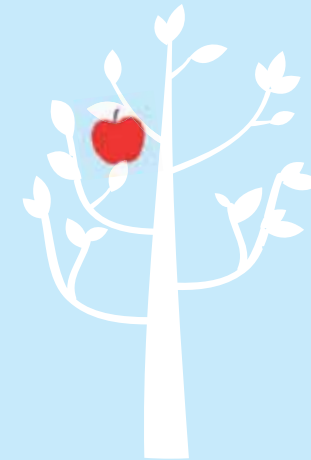
ユネスコスクール事務局

ESD : Education for Sustainable Development
持続可能な開発のための教育

| | |
|--|----|
| 序言 | 02 |
| 第1章 | |
| ESD Foodプロジェクト概要 | 05 |
| 第2章 | |
| ESD Foodプロジェクト実践例 | 15 |
| 「食と文化」地産地消が持続可能な社会を作る！ | 16 |
| 宮城県大崎市立大貫小学校 | |
| 国際協働学習事例 ① | 20 |
| 「食と経済」農業の後継者問題から考える持続可能性 | 22 |
| 福島県立安達高等学校 | |
| 「食と経済」「食」を通して考える持続可能な生活と社会 | 26 |
| 広島県立安古市高等学校 | |
| 国際協働学習事例 ② | 30 |
| 「食と社会」GKA ESD x Food Project:An Initiative for Social Inequality | 32 |
| ぐんま国際アカデミー中等部 | |
| 「食と環境」食料と水の安全保障 | 36 |
| 神戸大学附属中等教育学校 | |
| 「食と経済」伝統野菜の過去・現在・未来 | 40 |
| 大田区立大森第六中学校 | |
| 国際協働学習事例 ③ | 44 |
| 「食と経済」種と土をみつめて～Foodから風土へ～ | 46 |
| MIHO美学院中等教育学校 | |
| 第3章 | |
| ESDについて | 53 |
| 第4章 | |
| ユネスコスクール事務局から | 57 |

ESD Food Project
第1章

ESD Foodプロジェクト概要



ESD Food プロジェクト概要

ACCUが行う国際協働学習プロジェクトのご紹介

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は2011年からアジア太平洋地域のユネスコスクールとともに国際協働学習プロジェクトを展開しています。「お米」や「食」をテーマに、学校が位置する地域コミュニティや国、世界を持続可能な社会とするために、学校と地域が協働して「変化の担い手」としての児童生徒の皆さんを育むプロジェクトです。

国際協働学習を通して学習者が問題解決力を養い、国際的な視野を含む多様な価値観から意思決定する能力を身につけ、多様な文化や考え方が存在することを学び、批判的思考力や創造的思考力、長期的に物事を考える力を養うことを目指しています。

国際協働学習プロジェクトの目的

- ユネスコスクールにおける国際協働学習を促進すること
- ESDの推進・拡大に向けた地域間連携を促進すること
- 「変化の担い手」としての児童生徒を育むこと
- 学校と地域に根ざした活動を行うこと
- 次年度以降、参加校が自主的かつ自律的に協働学習プロジェクトを実施できるよう検討を進めること

ESD Food プロジェクトのご紹介

2015年度は文部科学省委託事業日本／ユネスコパートナーシップ事業で「食」をテーマに、ESD Food プロジェクトを日本とインドで実施しました。

「食」とそれを取り巻く状況は、生物多様性や気候変動、食の安全、消費、伝統文化など経済、環境、社会、文化など多彩な切り口が考えられるESDの豊かな題材です。

<参加校の紹介>

インド

| |
|--------------------------|
| Gem International School |
| Kuthuparamba High School |
| Navodaya Vidyalaya |
| CKNS GHSS Pilicode |
| Kendriya Vidyalaya |

日本

| |
|---------------------|
| 宮城県大崎市立大貫小学校（宮城県） |
| 福島県立安達高等学校（福島県） |
| ぐんま国際アカデミー中高等部（群馬県） |
| 東京都大田区立大森第六中学校（東京都） |
| 神戸大学附属中等教育学校（兵庫県） |
| MIHO 美学院中等教育学校（滋賀県） |
| 広島県立安古市高等学校（広島県） |

参加校選定基準

インドの学校はCEEが選定し、日本の学校は事業推進委員会のメンバーに「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」¹を念頭に、特に以下6点を重視し、選定していただきました。

1.【ESD理解、プロジェクト理解】

ESDに対する理解はプロジェクト参加にふさわしいのでしょうか。

本プロジェクトで重視する点（「変化の担い手」としての児童生徒／教員）と参加校の姿勢に親和性がありますか（HOPE 枠組み²に関する理解があるとなお良い）

プロジェクトの「活動アイデア」は問題解決型学習になっていますか。

2.【参加目的と期待される成果】

プロジェクト参加目的と計画が、プロジェクト全体の「期待される成果」につながっていますか。

3.【取り組み体制】

学校全体でESDに取り組んでいますか。

また本プロジェクトを行うにあたって、ある先生一人がプロジェクトを行うのではなく、校長先生の理解や他の先生との協力体制が整っていますか。

4.【学校と地域の連携】

学校と地域が連携した取り組みが計画されていますか。

5.【国際交流ネットワーク】

国際交流ネットワークに参画していく意欲がありますか。

そのための具体的なアイデアはありますか。

6.【英語対応、IT環境】

インドの学校と交流ができるように、語学面での体制（英語が話せる先生が協力的である、地域の方が助けてくれるなど）がとられていますか。

必要最低限のIT環境（設備、支援してくれる先生がいるなど）が整っていますか。

ESD Foodプロジェクトの進め方

参加校教員を対象にしたワークショップの実施

ESDのコンセプトやプロジェクト全体像の理解を目的にワークショップをインド・日本それぞれで実施しました（インド：7月、日本：9月実施）。ACCU教育協力部がファシリテートしました。

<各学校で取り組むトピック・交流相手校の決定>

ワークショップを先に行ったインドで、日本の学校と取り組みたい「食」に関わるトピックを挙げてもらいました。

インドから挙げたトピック

食生活の変化、遺伝子組み換え食品と健康、伝統的な農業方法、食品添加物、伝統的な食文化、食料保存、大量生産大量廃棄、栄養不良

これらを受け、日本の学校も各学校で取り組みたいトピックをあげました。学校種とトピックをもとに、交流相手が決まりました。

| テーマ | 食と経済 | | 食と環境 | 食と社会 | 食と文化 |
|----------|----------------------------------|-----------------------------|---|-----------------------|--------------------------------------|
| トピック | 生産 | 食の生産⇒加工⇒流通⇒消費⇒廃棄 | 食と水の安全 | 食と格差、食生活の変化 | 伝統的な食と文化 |
| 具体的なトピック | ・種（自家採種、購入種） ・土壌 ・遺伝子組み換え | ・若者の農業離れ ・大量生産・大量消費・大量廃棄 | ・開発による地球環境の変化（水不足、水の汚染） ・仮想水（食料輸入⇒水使用） | ・自然災害（防災） ・生活様式の変化 | ・食生活の推移・変化 ・理想的な食生活 ・地場産業への気づき |
| 日本の参加校 | MIHO 美学院中等教育学校 東京都大田区立大森第六中学校 | 福島県立安達高等学校 広島県立安古市高等学校 | 神戸大学附属中等教育学校 | くま国際アカデミー-中高等部 | 宮城県立大崎市立大貫小学校 |
| インドの参加校 | Gem International School, Kannur | Kuthuparamba High School | Navodaya Vidyalaya, Wayanad | CKNS GHSS, Pllicode | Kendriya Vidyalaya, Kannur |

1. http://www.unesco-school.jp/?action=common_download_main&upload_id=7705

2. <http://www.accu.or.jp/esd/jp/hope/index.html>

各校での進め方

ACCU はこれまでの経験を活かし、国際協働学習における8つの活動ステップを開発しました。この8つの活動ステップは国内外問わず、協働学習を行いたい方向けのツールとして作られたものです。地域の課題を地域の多様なステークホルダーとともに解決し、その過程を他地域、国の仲間たちと共有し、持続可能な社会づくりに貢献することを目指しています。

このステップに基づいて活動を行うことで、持続可能な社会を作る「変化の担い手」としての児童生徒（若者）が育まれる協働学習を実施することができます。

ESD Food プロジェクト参加校もこのステップに基づいて、活動を行いました。

<国際協働学習における8つの活動ステップ¹⁾>

STEP1：持続可能な開発に関するワークショップの実施

目的：児童生徒が持続可能な開発に対する関心・理解を高める

ワークショップは参加校の教員やプロジェクトコーディネーターが企画を主導します。このワークショップを通して、ESDの思想に基づいた活動を展開する基礎が整います。

プロジェクト実施中、児童生徒に持続可能な開発についてのコンセプトを忘れることが無いように伝えましょう。

STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査

（文献調査、インターネット調査など）

目的：トピックに関する知見を深める

児童生徒は、国際協働学習プロジェクトのトピックについて文献調査を行い、トピックに関する情報を得て、知見を深めます。

STEP3：コミュニティでのインタビュー調査の実施

目的：国際協働学習プロジェクトのトピックをテーマに児童生徒が暮らす地域の実情を把握する

児童生徒がトピックに基づいた地域調査を行います。

地域・国内外の相違点を知るために統一したワークシートや質問票を用意すると良いでしょう。

STEP4：調査分析・問題の抽出

目的：プロジェクトで取り扱う問題を特定する

教員のファシリテーションのもと、児童生徒がSTEP3の地域調査で収集したデータをまとめ、分析を行い、特に重要だと思える問題を絞り込みます。その際に政治色の強すぎるものや地域住民の間に対立をもたらすようなものはなるべく選ばないようにします。

調査分析したものを地域住民と共有すると更に良いでしょう。また、情報を他校と共有することで、たとえトピックが同じであっても、他校の地域では違った問題に直面しているということがわかります。

¹⁾ Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU),2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners-,Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU). pp.42-43.

STEP5：問題解決に向けて、とるべき行動を明確にする

目的：児童生徒は、自分たちで抽出した問題に対して、今の自分たちにできる行動が何かを考えます

教員やプロジェクトコーディネーターのファシリテーションのもと、学校の取り組みとして実現可能な活動案（アクションプラン）を作り上げます。アクションプランを考える際には、さまざまなステークホルダー（地域住民、児童生徒、教員など）が関われるような内容にしましょう。

STEP6：上記5の実施

教員の支援のもと児童生徒は計画したアクションプランを実行します。

STEP7：一連の活動内容を地域住民や保護者、プロジェクトに関わっていない児童生徒へ共有

目的：児童生徒が行った活動を知ることにより、プロジェクトに直接関わっていない人にも持続可能な開発、社会作りについて知ってもらう

児童生徒は、プロジェクトで行った一連の活動をまとめ、それをプロジェクトに関わっていない同じ学校の児童生徒や保護者、地域住民に対して発表し、フィードバックをもらいます。プロジェクト活動を題材にディスカッションをするのも良いでしょう。複数の学校と情報共有する際は、事前にツールやルールを協議しておく効果的な時間になるでしょう。

STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価(児童生徒、教員による自己評価)

目的：プロジェクトに関わった人々がプロジェクトの実施や他校との交流を通じて、どのような意識、知識、行動が変化したかを振り返る

HOPE枠組みを活用して、児童生徒は学習活動全体について、教員はプロジェクト全体のプロセスについて、また自身の変容についてそれぞれ評価・振り返りを行います。

それぞれのステップで国内外の学校とテレビ会議をすることでより充実した協働学習となります。

HOPE枠組み

HOPE 枠組み¹は 2008 年にユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が「国連 ESD の 10 年」の取り組みの一つとして実施した ACCU-UNESCO イノベーション創成プログラム²において ESD の実践を評価する手法として生まれました。その後も議論を重ね HOPE 枠組みは評価だけでなく、持続可能な社会を構築するための教育の質の向上に寄与する教育枠組みとして発展しました。

HOPE 枠組みは、「国連 ESD の 10 年」(2005 年～ 2014 年)の間にアジア太平洋地域で実施された ACCU-UNESCO イノベーション創成プログラムを評価するツールとして、2008 年に ACCU と専門家によって作成されました。HOPE 枠組みはのちに持続可能な社会の実現に向けて、教育の質を向上させる教育・学習の枠組みへと進化しました。

< HOPE 枠組みを構成する要素 >

持続可能な社会の構築に寄与する教育の質とは・・・

| | |
|------------------------------|---------------------|
| Holistic | ホリスティック (包括的) であること |
| Ownership-based | 主体性に基づくこと |
| Participatory in Partnership | 参加型であること 協働すること |
| Empowering | エンパワーメントをもたらすこと |

HOLISTIC

つながること、包括的であること

- 多様な事柄がつながりあうことの必要性を認識する
- ◇環境、社会、経済、文化、社会のつながり
- ◇ローカルとグローバルのつながり
- ◇過去、現在、未来のつながり
- ◇3Hs : Head (あたま)、Heart (こころ)、Hand (て) の全人的な発達
- ◇異世代間の学び
- ◇学びや学習に多様な手法を用いる
- ◇生涯学習

OWNERSHIP-BASED

主体性に基づき、一緒に作り上げること

- 個人やコミュニティ、もしくは組織が活動の内容、過程、結果に対して主体性や責任感、説明責任をもつ
- ◇問題や課題の本質を理解し、必要な情報を収集し、解決策を見つけるためのコミットメントと責任を関係者で共有する
- ◇問題の解決に必要とされる「資源 (人材、地域、財源)」の特定と調達を自分たちで行う

PARTICIPATORY

真摯に関わること

- 個人やコミュニティ、組織などそれぞれの立場にある人が持続可能な開発のための学びに積極的な役割があることを認識する
- ◇学習者や多様な関係者が学習活動の計画・実施・モニタリング評価に関わる
- ◇「教えー学び」の過程において多様な関係者の知識や価値が反映されることを認識する

In PARTNERSHIP

ともに生き、協働すること

- 問題の複雑性を把握し、問題解決に向けてどの人も協働してより持続可能な社会を作り上げる
- ◇多様な関係者が連携、調整、協働する
- ◇利害関係を越えてともに問題解決する

EMPOWERING

変容すること

- 自己変容と社会の変容が持続可能な社会をつくることを認識する
- ◇自分自身の価値観や行動、生活様式を再考する
- ◇持続可能で平和な世界を実現させるための大きな自信を持つ
- ◇若者が「変化の担い手」として関与する

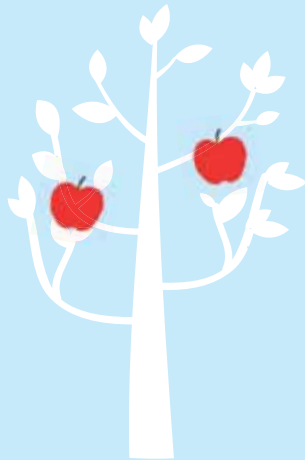
1 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), 2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU). pp.58-59.

2 ACCU が 2006 年から 2008 年にかけて実施したプログラム。ESD をアジア太平洋地域で実施・推進する上で好事例となる革新的な事業の発掘と支援を行いました。

ESD Food Project

第2章

ESD Foodプロジェクト実践例



「食と文化」-- 地産地消が持続可能な社会を作る！



有機農法によるお米作りを体験する児童

●学校概要

宮城県の北部に位置する大貫小学校。3年生から6年生までの4年間をととして「ふるさと大貫」の学習を進めています。ESD Food プロジェクトの前身であるESD Rice プロジェクトにも参加し、タイやフィリピンの小学校とも交流を続けています。

●学校情報

学校代表：菊地 正美（校長）
ESD Food プロジェクト担当教員：佐藤 弘子
所在地：宮城県大崎市田尻大貫字境 37-1
TEL：0229-39-0309 E-mail：osaki_oonuki@educ.osaki.miyagi.jp

プロジェクト内容

プロジェクトは主に6年生の総合的な学習の時間の「自然環境を見つめよう」という題材で実施されました。「食べ物の生産地」から持続可能な社会について考えた児童は「地産地消」という考え方の大切さを学びました。家庭科の授業では「くふうしよう楽しい食事」という題材で献立作りを実施しました。児童が考えた献立には旬の野菜や自宅で取れた野菜を使うなど、総合的な学習の時間で学んだ内容が活かされました。

ESD Food プロジェクトをきっかけに、インドだけでなくこれまで関係のあったタイの小学校とも「食」をテーマにテレビ会議等を通じて交流し、地域の伝統的な食べ物や給食の献立を共有し、互いの国の相違点を学びました。

プロジェクト参加者：

対象学年：6年生20人

プロジェクトが実施された教科・科目など：

総合的な学習の時間、家庭科

学びの広がり

学校外との連携：NPO、教育委員会、大学、児童の保護者、安達高等学校（福島県）、Kendriya Vidyalaya, Kannur（インド）、Jirasartwithaya School（タイ）

ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施 ・教員を対象にしたワークショップ実施 ・テーマに基づく活動の方向付け（指導計画の作成） |
| 10月 | STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・食べ物の産地から考える持続可能性について |
| 11月 | STEP4：調査分析と問題の抽出 ・調査結果から見てきた食材についての考察 ・家庭科での献立作り ・インドとのテレビ会議（学校生活、旬の野菜、給食の紹介） |



| | |
|--------------|--|
| 2015年 12月 | ・学校紹介の方法の工夫 ・タイとのテレビ会議（学校生活、日常の食事、給食、行事食の紹介） |
| 2016年 1月 | STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価実施 ・活動の振り返り ・異文化体験（インドと日本の伝統的なお菓子を交換） |

< ホールスクール・アプローチ¹ に向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・教員研修を実施し、6年生が取り組んでいる ESD Food プロジェクトについて説明し、共通理解が図れるようにしました。
- ・学校外研修で得た ESD やユネスコスクールの活動について、他教員に情報提供するように心がけました。

学校外との連携強化

- ・総合的な学習の時間での活動は2つのNPOに支援いただいておりますが、活動のねらいを事前に具体的に相談することで専門的な知識を子どもたちに分かりやすく伝えてくれました。また、海外の学校と交流する際に、通訳をしていただくことが恒例になっています。
- ・地域の人々が子どもたちの活動を支援しようと「大貫小学校支援ボランティア」を結成し、学校のさまざまな活動を支援してくださっています。

¹ ホールスクール・アプローチ：特定の学習活動を1つの教科、教員のみで実施するのではなく、学校全体（例：学校経営、学校環境やカリキュラムなど）や地域との連携も意識し、学習活動を行うこと。ESD Food プロジェクトではESDの思想に基づいたホールスクール・アプローチを展開している。詳細はユネスコ・アジア文化センター著 [2016] 『これからのユネスコスクールを考えよう』を参照のこと。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

教員の声

- ・「環境・経済・社会・文化」の面から考えること、「過去・現在・未来」の時間軸で考えることの2点を教員が意識しておくことで、子どもたちの調べ学習や活動の支援がしやすくなりました。
- ・総合的な学習の時間だけでなく、教科学習とも関連させて取り組むなど教科間での広がり、深まりが見られるようになりました。
- ・国際協働学習に取り組んでいることが学校の特色ある教育活動のひとつになりつつあります。

< 今後に向けて >

- ・今まで6年生が国際協働学習に取り組んできましたが、交流を継続するためにも5年生も実施してはどうかという意見が出るようになりました。継続するための方策を他の教員と一緒に考えています。

国際協働学習 テーマ：「食と文化」

参加校：大崎市立大貫小学校（宮城県）
Kendriya Vidyalaya, Kannur（インド）
Jirasartwithaya School（タイ）

小学生同士の交流は学校紹介から始まりました。インドの学校が自国のダンスや歌を披露してくれたことから、大貫小学校の児童も当初予定していなかった自国のダンス（ソーラン節）や歌（ふるさと）を披露しました。また、味覚を使った交流として、インドと日本の伝統的なお菓子を交換し、それぞれの国の食べ物の相違点を学びました。以前から交流を続けているタイの小学校とも「食」をテーマに行事食や給食の献立について共有しました。



ソーラン節を披露する大貫小学校児童

テレビ会議を行って...

大貫小学校教員の声

- ・自分たちが学習したことや、地域のことを相手校に伝えるための工夫ができるようになり、児童の表現力の向上が見られました。
- ・テレビ会議では、今までは事前に考えた発表事項だけを伝えるだけでしたが、その場で質問したり、聞かれたことに答えたりと交流自体を楽しむようになりました。
- ・小学校なので言語の問題や教育事情が違うため、交流を設定するまでが大変ですが、子どもたちの笑顔や異文化理解・自国理解が深まる様子を見られることが喜びにもなっています。
- ・国際協働学習を継続することで、異文化理解が進んだとともに海外の学校との交流が少し気軽になって来ました。交流の内容も大切ですが、第一歩は継続することであると感じています。
- ・インドとお菓子を交換して食べました。これは異文化を直接体験できる有効な方法だと思いました。

大貫小学校児童の声

- ・インドの学校からもらったバナナチップスを見たとき、バナナだから甘いだろうと思ったのにしょっぱかったです。きっと日本のかりんとうを食べているインドの人たちも驚いていることでしょう。



「食と経済」-- 農業の後継者問題から考える持続可能性



震災後の福島県の農業問題に取り組む関元弘氏(ななくさ農園)へのインタビュー

●学校概要

福島県で初めてユネスコスクールに加盟した安達高等学校。福島県内の加盟校の中では唯一の高校でもあります(2016年2月現在)。2011年3月に発生した東日本大震災以降、原発事故に伴う放射性物質拡散のために農業や漁業において大きな被害を受けた福島県。安達高校では、高校生がこの現状から「変化の担い手」として、解決の糸口が現在も見えないこの大きな課題に取り組むために、教科横断的な復興教育と国際理解教育に取り組んでいます。

●学校情報

- 学校代表：佐藤 信常(校長)
- ESD Food プロジェクト担当教員：千葉 崇(外国語科)、石井 伸弥(理科)
- 所在地：福島県二本松市郭内二丁目347
- TEL：0243-22-0016 E-mail：adachi.h@pref.fukushima.lg.jp
- Web サイト：http://www.adachi-h.fks.ed.jp/

プロジェクト内容

「福島県の食」の生産→加工→流通→消費→廃棄の中にある持続可能性を阻む要因を、調べ学習やJAへのインタビューを通して学びました。一連の調査で「農業従事者が減少している」という課題を知りました。生徒が課題解決策を考えるために、震災後の福島県の農業問題に取り組む農家の方へのインタビューやESD Food プロジェクト参加校の児童生徒を中心に農業に関するアンケートを実施し、多角的に情報を収集しました。収集した情報を参考に、農

業に従事する後継者問題の解決に向けて具体的なアクションプランを策定し、実行に向けて準備を進めています。

プロジェクト参加者：

対象学年：1年生～2年生 有志メンバー9人

プロジェクトが実施された教科・科目など：

課外活動、家庭科

学びの広がり

学校内での連携

教科間での連携：家庭科、地理歴史科、情報科


学校外との連携：全国農業協同組合連合会(JA)

事務所、企業、公共施設、安古市高等学校(広島県)、大貫小学校(宮城県)、Kuthuparamba High School(インド)



ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | ・プロジェクトに参加する生徒の選考、顔合わせ |
| 10月 | <p>STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施</p> <p>・「40年後の幸せな村」ワークショップ実施</p> <p>STEP2：ESD Food プロジェクトで取り組むテーマに関する調査</p> <p>・文献、インターネットを使って事前調べ学習の実施</p> <p>・テーマによる校内ワークショップ実施</p> <p>STEP3：コミュニティでのインタビュー調査</p> <p>STEP4：調査分析と問題の抽出</p> <p>・テーマ決定。テーマ内容に基づく、インタビュー、調査先検討</p> <p>・インドの学校、国内の他地域の学校とのSkype、E-mail等での情報共有開始</p> |
| 11月 | <p>STEP3：コミュニティでのインタビュー調査</p> <p>・農家、JA、各企業、公共施設等でのインタビュー調査</p> |

| | | |
|--------------|--|--|
| 2016年 11月 | STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化 ・現状調査、分析、問題を抽出するためのワークショップ実施 ・解決策の模索 |  |
| 12月 | STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化 STEP6：STEP5の実施 ・問題解決策の仮定、検討、実証 | |
| 2016年 1月 | STEP7：一連の活動内容の他者への共有 ・内容報告書のための資料作成 ・農業に関するアンケート実施 STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価実施 ・HOPE 枠組みを活用した活動評価・自己分析 ・次年度の活動に向けての課題設定 | |

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・地元の農家の方とつながりのある家庭科教員の協力を得て、農家の方へのインタビューが実現しました。
- ・家庭科の授業では新聞を活用しながら食の問題を考える時間を設けました。
- ・農家の方へのインタビュー時には地理歴史科の教員にも同行してもらい、専門的な知見を得ることができました。

学校外との連携強化

- ・地域の農業についての知識、課題等について得ることができました。
- ・農家への訪問により福島県で震災後に農業を続けていく大変さ、困難、そして未来への展望を学ぶことができました。
- ・活動を通して、地ワイン製造に関わる可能性ができました。地域産業である木工業とも連携し、ワインを詰める樽製作のアイデアも出ています。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

児童生徒の声

- ・一つのことを調べたことで、自分があまり気にしていなかったことをしっ

かり考えることができました。話をまとめることや問題を考えることの難しさを知り、自分の無力さを痛感することもありましたが、自分の成長につながったと思います。

- ・大切なことは知った情報を発信するという。発表の場でしっかり伝えたいと思います。

教員の声

- ・プロジェクトでは生徒と教員、教員と教員の学びあいがありました。教員も生徒とともに成長できる機会となりました。
- ・9月に実施された、教員を対象にしたワークショップに参加し、持続可能な開発に向けて、自分たち教員が生徒へどのようにアプローチしていくかが明確になりました。教員はファシリテーターとして生徒を導くだけでなく、ともに課題解決に取り組む、学びの姿勢が大事だと理解できました。
- ・自分たちの指導方法などを振り返り、検討する良いきっかけになりました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・自分たちで調べ、考え、提案しながら方向性を決定していくプロセスは、一人ひとりの責任感が醸成され、プロジェクトに前向きに取り組む姿勢が見られました。
- ・社会問題に対して漠然としていた意識が、今は農業やインド国内のことなど、具体的なニュースに関心を持つようになりました。

< 今後に向けて >

- ・次年度より、継続的長期的なプロジェクト推進を目的に、今回のプロジェクト参加者をベースメンバーとしてユネスコサポーターズクラブを立ち上げることが決まりました。
- ・「復興教育」「国際理解教育」に併せて、ESDの新たな柱として「食（ESD Food プロジェクト）」が学校内で印象付けられ、活動の継続が期待されています。

「食と経済」--「食」を通して考える持続可能な生活と社会



地域のスーパーマーケットを訪問し、経営者の視点を知る

●学校概要

創立40周年を迎えた安古市高等学校。2013年にユネスコスクールに加盟しました。広島県が推進する「探求コアスクール」の指定を受け、生徒自身が現代社会における解決困難な諸課題に対して、問題点を明らかにし、他者との協働によって、克服・解決する提案・行動ができるような教育活動に取り組んでいます。

●学校情報

学校代表：船津 久美（校長）
ESD Food プロジェクト担当教員：
煙井 成（公民科）、田中 裕美（家庭科）、新長 太（外国語科）
所在地：広島県広島市安佐南区毘沙門台三丁目3番1号
TEL：082-879-4511 E-mail：yasufuruichi-h@hiroshima-c.ed.jp
Web サイト：http://www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp/

プロジェクト内容

大量生産・大量消費・大量廃棄をテーマに個人研究、店舗インタビューを実施し、生徒自身が「食品廃棄」の課題に気づき、このトピックでプロジェクトを進めることになりました。課題解決に向けて、食品廃棄の原因についてアンケートを実施し、「賞味期限・消費期限が過ぎていれば捨てる」「余った食材は捨てる」という意見が多いことが分かり、今後はこの課題解決に向けて具体的にとるべき行動を明確にし、取り組んでいきます。プロジェクトを通して、生徒の主体性の向上やコンピテンシーの育成も目指しています。

プロジェクト参加者：

対象学年：2年生「家庭研究」を選択している46名

プロジェクトが実施された教科・科目など：

家庭科

学びのつながり

■学校内での連携：教科間での連携：総合的な学習の時間、家庭科、情報科、外国語

学校外との連携：地元の商業施設、Kuthuparamba High School(インド)、生徒の保護者



ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | <p>STEP1：持続可能な開発に関するワークショップ</p> <p>(1)「2040年の教育はどうか」 (2)「村民が幸せに暮らせる村の地図をつくろう」</p>  <p>「経済」「環境」「倫理・宗教」「社会」のバランスのとれた発展が必要。生徒が考えた村民が幸せに暮らせる村</p> |
| 10月 | <p>STEP2：ESD Food プロジェクトで取り組むテーマに関する調査</p> <p>・「食と経済」について個人研究</p> |

| | |
|--------------|---|
| 2015年 11月 | <p>STEP3：コミュニティでのインタビュー調査 STEP4：調査分析と問題の抽出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のタイプの異なる商業施設でのインタビュー実施 <ul style="list-style-type: none"> A：大規模商業施設（全国展開） B：中規模商業施設（中国地方展開） C：地域特産店舗（地産地消型） D：小規模商業店舗（団地内） ・インドの学校、国内の他地域の学校との Skype、E-mail 等での情報共有開始 |
| 12月 | <p>STEP7：一連の活動内容の他者への共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校説明会に来ていた中学2年生に ESD Food プロジェクトの取り組みを報告 |
| 2016年 1月 | <p>STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化 STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「食品廃棄」「食品ロス」の原因調査。課題解決に向けての行動を明確化。 ・自己評価 |

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・学校長の積極的な支援のもと、教科横断的に取り組みが進められ、プロジェクト実施上の諸課題に対応することができました。

学校外との連携強化

- ・これまでの教育活動では地域と関わることはありませんでしたが、ESD Food プロジェクトを機会に連携ができました。
- ・地域の商業施設にインタビューを実施したことで、「食と経済」の問題点が明確になりました。学校や教室では「課題発見」には限界があることがわかりました。学校活動を今後も地域にも広げていきたいです。
- ・地域の店舗インタビューを通して生徒の積極性が育まれました。インタビューの準備（アポイントメント取り）からやってみようという意見もありました。
- ・中学2年生を対象にした学校説明会では、家庭科の公開講座の中で、ESD Food プロジェクトについて生徒が説明しました。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

児童生徒の声

- ・協働学習で問題の本質を知り、それについて良く考え、解決策を見つけることの大切さを学ぶことが出来ました。
- ・国内だけでなく、海外に向けて調べる中で、私たちの生活がどうやって成り立っているか知ることができました。
- ・社会人にインタビューすることで、現在の日本の課題が明確になり、視野が広がりました。
- ・中学2年生に協働学習について伝えることは難しかったけれど、大変良い経験になりました。社会問題について主体的に取り組んでいきたいです。

教員の声

- ・課題を発見するのはインターネットの情報だけでなく、実際にさまざまな人と話をすることが効果的であることを学びました。
- ・総合的な学習の時間に ESD とユネスコスクールを取り入れるよう、学習計画と年間計画を策定しました。
- ・各教科で「協働学習」が進むよう、管理職を中心にさまざまな研修が実施されるようになりました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・地域インタビューをきっかけに、自主的に行動しようとする態度が多く見られました。
- ・学校説明会に来ていた中学2年生に生徒自らが ESD Food プロジェクトについて説明しました。発表の準備をする中で生徒たちは改めて課題発見やプロジェクトの意義について再認識をしたようです。

< 今後に向けて >

- ・ESD Food プロジェクトを次年度以降も自主的に発展させていくために、管理職および担当教員間でプロジェクト実施上の課題と今後の取り組みについて検討を始めました。
- ・生徒の主体的な学びを深めるためにカリキュラムの改善を行っており、ESD Food プロジェクトで展開された協働学習をどのように活用していくかを検討しています。

国際協働学習 テーマ：「食と経済」

参加校：安達高等学校（福島県）
安古市高等学校（広島県）
Kuthuparamba High School（インド）

安達高等学校と安古市高等学校は同一テーマに取り組む参加校同士、自校紹介とお互いの学校で取り組んでいるプロジェクト内容を共有した後、インドの学校との交流に臨みました。Kuthuparamba High School（インド）とのテレビ会議のために、安達高等学校はカレーを題材に食料の「生産→加工→流通→消費→廃棄」を調べ、安古市高等学校はインドのカレー文化を調べ、交流に臨みました。



テレビ会議を行って...

安達高等学校教員の声

- ・限られたプロジェクト期間の中で、また通信環境が異なる国との Skype を使った交流は意思疎通を図るには十分ではありませんでしたが、交流

できた瞬間の生徒達の目の輝きは忘れることができません。

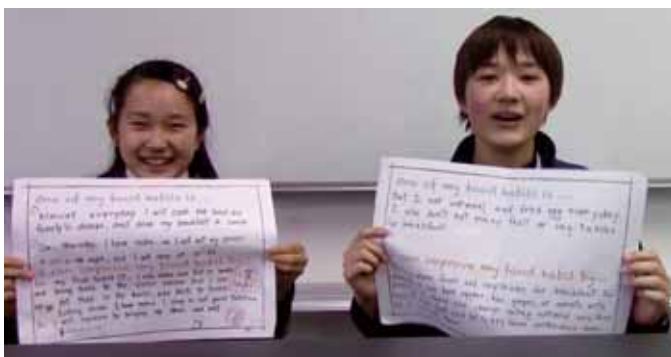
- ・農業従事者の後継者に関するアンケートをインドの方にも協力してもらいました。アンケート作成時に質問内容をインドの人にもわかる内容になっているか検討する必要があります。日本とインドの比較によって多角的、広角的な視野を獲得することができました。

安古市高等学校教員の声

- ・学校交流は回数が少なかったですが、大変新鮮で新しい経験であり、今後も続けていきたいです。
- ・インドの高校との交流では、交信がスムーズにいきませんでした。粘り強く生徒たちが交信する姿を見て、英語でのコミュニケーションに緊張しながらも、交流に大きな期待を生徒たちが持っていることが分かりました。
- ・生徒一人ひとりが自分の英語力を駆使しながら、画用紙を使って英文を書き、「筆談」作戦で必死に相手に伝えようとし、相手との会話を真剣に理解しようとする態度は、教室での授業では見ることができない状況でした。
- ・ユネスコスクールとして ESD 実践に活発な安達高校と交流する中で、ESD Food プロジェクトの意味を深く理解できるようになりました。



「食と社会」 -- GKA ESD x Food Project: An Initiative for Social Inequality



“私の食生活”を振り返り、見直しました

●学校概要

ぐんま国際アカデミー（GKA）は小学校から高校までを有する小中高12年一貫校です。国語と社会以外の授業は全て英語で行われる、英語イマージョン教育が学校の特徴の一つでもあります。ESD Food プロジェクトも国際色豊かな教員連携のもと進められました。

●学校情報

- 学校代表：吉田 シツエ
- ESD Food プロジェクト担当教員：高松 森一郎（理科）
- 所在地：群馬県太田市内ヶ島町 1361-4
- TEL：0276-47-7711
- Web サイト：http://www.gka.ed.jp

プロジェクト内容

ローカルな視点とグローバルな視点で社会格差問題に取り組みました。国内外の「食」にまつわる格差問題を把握した上で、自分自身や家族の食生活を分析しました。各家庭での食生活改善プロジェクトを生徒自身が考え、計画されたアクションプランに基づいて活動を展開していきます。グローバルな問題に「中学生だからこそできる」活動や方法を生徒自身が検討し、実際に取り組んでいます。

プロジェクト参加者：

対象学年：中学1年生81名

プロジェクトが実施された教科・科目など：

総合的な学習の時間

学びのつながり

学校内での連携：

教科間での連携：英語、国語、数学、化学、生物、世界史、美術、情報科、家庭科

教科外での連携：図書室

学校外との連携：NPO、生徒の保護者、Government Higher Secondary School, Pilicode（インド）

ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | ・プロジェクトに関与する教員間でのミーティング実施 |
| 10月 | <p>STEP1：持続可能な開発に関するワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村民が幸せに暮らせる村の地図を作ろう ・世界がもし100人の村だったら <p>STEP2：ESD Food プロジェクトで取り組むテーマに関する調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ実施：“インドについて知っていることを確認しよう” ・インドの学校との情報共有のための学校紹介動画作成 |
| | <p>実際の学校の様子を動画で共有することで、臨場感を持ってコミュニケーションが取れます！</p> |
| 11月 | <p>STEP4：調査分析と問題の抽出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界がもし100人の村だったらワークショップの振り返り ・国内外の食と格差問題に関するワークショップの実施 ・Government Higher Secondary School（インド）とテレビ会議 |

| | |
|--------------|--|
| 2015年 12月 | <p>STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化</p> <p>STEP6：STEP5の実施</p> <p>STEP7：一連の活動内容の他者への共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ実施：“食生活を見直そう”（保護者、生徒対象） ・生徒の家庭での食生活改善プロジェクトの計画と実践 ・食生活に関する動画を作成し、Government Higher Secondary School（インド）と共有 ・グループ・プロジェクトの立案、課題背景の調査 |
| 2016年 1月 | <p>STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループプロジェクト案の発表 ・NPO 法人フードバンク山梨 理事長米山けい子氏による講義 |

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・専門性*、国籍**、世代の異なる教員がチームを組み、プロジェクトを実施しました。

* 専門性：英語、国語、数学、化学、生物、世界史、美術、
** 国籍：日本、アメリカ合衆国、カナダ、インド、ケニア

- ・教員間での話し合いの時間を多く設け、プロジェクトのコンセプトや意義、実施方法について共通認識を持つようにしました。また、各教員の個性が出るように、こまかな部分は各プロジェクトの担当教員のアイデアが活かせる環境づくりに務めました。
- ・ESD Food プロジェクトは教員のイニシアティブを活かしたボトムアップ的な教育活動の事例として、学校全体に紹介してもらえることになりました。

学校外との連携強化

- ・食の問題に取り組むNPOの専門家から生徒が立案したプロジェクトに専門的なアドバイスをいただきました。
- ・NPOの専門家の現場の状況や思いに触れることで、生徒自身の活動がどのように社会と結びつくのかを考える良い機会となりました。

- ・冬休みの課題として、生徒立案の食生活改善プロジェクトが各家庭で実施されたことにより保護者の食に対する意識の変化が見られるようになりました。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

教員の声

- ・プロジェクトを実施して、管理職がESDや国際協働学習を用いた総合学習の時間に興味を示すようになりました。
- ・教員のアイデアを活かせる環境が増え、積極的にプロジェクトに関与することができました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・NPOと連携をすることで、生徒自身の活動がどのように社会と結びつくのかを考える良い機会となり、その結果、他教科、他学年とは異なる「特別感」が生まれ、総合学習の時間に興味を持って取り組む生徒が増えました。

< 今後に向けて >

- ・ESDに興味がある教員がコアメンバーとして、校内でのイニシアティブをとる動きがでてきました。
- ・総合学習の時間を更にユニークで意味のあるものにしていくために、管理職がESD Food プロジェクトを一つのモデルケースとして認識するようになりました。他学年と共有し、具体的な方法やテーマ設定について、検討していくことになっています。

「食と環境」-- 食料と水の安全保障



プロジェクトを行ったインド・ケララ州の昼食。陶器のお皿の代わりにバナナの葉を用いて右手で食べます

●学校概要

「グローバルキャリア人(=国際的視野を持ち未来を切り拓く人材)の育成」を教育目標に掲げ中高一貫教育を推進している神戸大学附属中等教育学校。神戸大学との一体運営による統一プログラム「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発に向け、「総合的な学習の時間」における課題研究をESDの観点から構成しています。

●学校情報

学校代表：船寄 俊雄(学校長)
プロジェクト担当教員：勝山 元照(副校長)、岩見 理華(外国語科)
所在地：兵庫県神戸市東灘区住吉山手 5-11-1
TEL：078-811-0232 E-mail：kuss-secondary-admin@edu.kobe-u.ac.jp
Webサイト：http://www.edu.kobe-u.ac.jp/kuss-top

プロジェクト内容

「食料と水」から持続可能性を考えました。持続可能性を阻む要因を知るために食料と水の格差問題を学ぶ中で、「バーチャルウォーター*」や「地産地消」の考え方を学びました。「地産地消」を推進する外部専門家から話を聞くほか、「バーチャルウォーター」や「地産地消」の考え方を生かした献立を考え、国内外に成果を発信していきます。また、保護者の協力も得て、実際に考えた献立で調理実習も行う予定です。

*バーチャルウォーター：輸入品を仮に自国で生産した場合にどの程度の水が必要かを推定した水の量のこと。

プロジェクト参加者：

対象学年：高校1年生170名

プロジェクトが実施された教科・科目など：

英語、社会

学びの広がり

学校内での連携：社会科教員、栄養教員の協力を得て特別授業を実施

学校外との連携：大学、地元企業、生徒の保護者

ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | ・世界の水の問題についてのガイダンス |
| 10月 | STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・水が限りある資源であることを学び、各国の水事情を学ぶ |
| 11月 | STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・身の回りの水の使用量を知る ・安全な水の普及の重要性を知る |
| 12月 | STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・「バーチャルウォーター」や水分野での日本の国際協力について知る |
| 2016年 1月 | STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 STEP4：調査分析・問題の抽出 STEP5：問題解決に向けて、とるべき行動の明確化 ・「水」と「食料」の問題について自分たちができることをまとめ発表 |

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・主に英語の授業で ESD Food プロジェクトを実施したが、社会科教員と栄養教員の協力も得て特別授業を実施しました。

学校外との連携強化

- ・神戸大学からの指導、助言を受けました。
- ・「ESD 推進ネットひょうご神戸」の協力を得て、「地産地消」推進者に講演をしていただきました。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

教員の声

- ・ESD を学校全体で推進している体制でしたが、ESD Food プロジェクトを通してこれまで社会科を中心に推進されてきた ESD が英語科にまで広がりました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・生徒の課題認識と課題に対する理解が深まり、一地球市民として解決策について考え、意見を発信できるようになりました。
- ・水や食料を通して国際的な問題への理解が進みました。

< 今後に向けて >

- ・ESD Food プロジェクトを通して大学の協力を得ながら地元の企業や地域で活躍している方との連携を強化するほか、インドの学校との交流を行っていく予定です。



「食と経済」-- 伝統野菜の過去・現在・未来



伝統野菜を作る生産者とその想いを未来につなぐ生徒たち

●学校概要

環境教育、国際理解教育、防災教育、平和教育を柱に、持続可能な社会の担い手の育成に励んでいる大森第六中学校。ユネスコスクールに加盟して以来、地域全体で児童生徒を育むために、地域の小・中・高・大、教育委員会、企業、NPOと連携をとり、ESDを推進しています。

●学校情報

学校代表：松尾 廣文

ESD Food プロジェクト担当教員：柴崎 裕子（理科）、清水 純樹（社会科）

所在地：東京都南千束 1-33-1

TEL：03-3726-7155 E-mail：om6-j03@educet01.plala.or.jp

WEB：http://academic3.plala.or.jp/om6j/

プロジェクト内容

東京都大田区の伝統野菜である馬込三寸人参や馬込半次郎胡瓜の過去と現在を調べ、昔から受け継がれてきた「食」に関する人々の知恵を未来に受け継ぐことをテーマにプロジェクトが実施されました。文献等を用いた調査、街頭アンケートによる伝統野菜の知名度調査、農家へのインタビューを通して伝統野菜の知見を深め、生産者の思いを知り、伝統野菜の未来をローカルな視点とグローバルな視点で考えました。

プロジェクト参加者：

対象学年：コアメンバー24人（1年生：9人、2年生：6人、3年生：9人）


プロジェクトが実施された教科・科目など：

課外活動

学びの広がり

学校外との連携：NPO、郷土博物館、農家、農業協同組合、MIHO美学院、中等教育学校（滋賀県）、Gem International School（インド）

ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|---|
| 2015年 9月 | <p>STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施 ★プランターによる、馬込三寸人参の栽培開始。</p> |
| 10月 | <p>STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施 ・第一回ミーティング：理想の社会を図式化しよう！</p>  |
| 11月 | <p>STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・図書館での文献調査 STEP3：コミュニティでのインタビュー調査 STEP4：調査分析と問題の抽出 ・伝統野菜について生産者にインタビュー（生産者の想いを知る） ・駅前での消費者への街頭インタビュー（伝統野菜の知名度、食材を選ぶときの基準） ★神奈川県立有馬高等学校¹望月浩明先生による特別レクチャー</p> |

1. ACCUが2011年～2015年で企画・運営した国際協働学習プロジェクト（ESD Rice プロジェクト）参加校

| | |
|--------------|---|
| 2015年 11月 |  |
| 12月 | ・MIHO 美学院中等教育学校、Gem International School (インド) とテレビ会議 |
| 2016年 1月 | ・MIHO 美学院中等教育学校、Gem International School (インド) とテレビ会議 |

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・英語科や技術科の教員を中心に多くの教員を巻き込んでインドとのテレビ会議の準備などを行いました。定期的にそのような機会を持つことで、管理職を含む多くの教員に生徒の活動の様子や考えを知ってもらうことができました。

学校外との連携強化

- ・ESD Food プロジェクトを通して、既存の地域とのつながりを活用し、新たに NPO や博物館の専門家や郷土野菜の生産者との連携を築くことができました。
- ・ESD Food プロジェクトの活動を知った NPO や博物館の専門家から手厚い協力が得られました。情報提供だけでなく、地域のお祭りで伝統野菜を使用したお菓子の販売もお手伝いさせていただきます。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

教員の変化

- ・ESD Food プロジェクトをきっかけに海外との協働や来訪者対応をする教員の国際交流委員会が発足しました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・当初は教員が計画、指導する形でしたが、フィールドワークを通して学んだことを生徒自らが更に調べ、それを Gem International School (インド) の生徒に分かるように説明しようと工夫する姿が見られました。
- ・伝統野菜の過去と現在を学び、生産者の想いに触れることで、生産者と消費者をできるだけ顔の見える関係に近づけることの大切さに生徒自身が気付くことができました。

< 今後に向けて >

- ・活動の成果をさらに広めるために全校生徒への発表や地域のお祭りで伝統野菜を使ったお菓子の販売を予定しています。

国際協働学習 テーマ：「食と経済」

参加校：大森第六中学校（東京都）
MIHO 美学院中等教育学校（滋賀県）
Gem International School（インド）

大森第六中学校と MIHO 美学院は同一テーマに取り組む国内参加校同士、日本語と英語で自己紹介とお互いの学校で取り組んでいるプロジェクト内容を共有し、意見交換を行いました。その後、Gem International School（インド）を交えてのテレビ会議は事前に各校でのプロジェクトの進捗状況を把握した上でテレビ会議に臨みました。



テレビ会議を行って...

MIHO美学院中等教育学校教員の声

- ・生徒が世界に目を向け、関心の幅を広げる機会となりました。
- テレビ会議をして、国内外の学校とつながりが生まれたことにより、国内のほかの地域や世界で何が起きているかに関心を持つようになりました。もっと国内外のほかの学校の行っているプロジェクト活動について知りたい、英語でもっとコミュニケーションがとれるようになりたいという声が生徒から上がってきました。



大森第六中学校教員の声

- ・他校の先生より音声聞き取れないことも想定して筆記用具を用意しておいた方が良いというアドバイスを事前に受けていたため、音声聞きづらい中でも筆談でコミュニケーションをとることができました。

「食と経済」-- 種と土をみつめて ~ Food から風土へ ~



狩野永徳の「洛中洛外図」にヒントを得て、コミュニティのサステナブルマップを作成

●学校概要

MIHO 美学院中等教育学校は滋賀県の山間地域にある自然豊かな里山の一角に位置する全寮制の学校です。2012年に設立され、2016年2月現在は4年生までが在籍しています。「美を求める心」を校是とし、日々、他者と協働する生活を送る中で「独立と協調の精神」を養い、「祈りと感謝」を体得すること、自然農法を中心としたフィールドワークを通して、「自然順応、自然尊重」を学んでいます。

●学校情報

学校代表：小山 玉男

プロジェクト担当教員：駒井 勉（主幹教諭）、福井 宏和（理科）

所在地：滋賀県甲賀市信楽町畑 369

TEL：0748-82-3435 E-mail：office-mb@mihobigaku.jp

Webサイト：http://www.mihobigaku.jp

プロジェクト内容

日々学校の農園で行っている無農薬・無施肥による「自然農法」から着想した、「種と土」をテーマに食の生産（土地の利用）に関する活動を行いました。常にホールスクールアプローチを意識し、①生徒間の連携、②生徒と教員の連携、③教員の連携、④生徒（学校）と地域の連携、⑤専門家の連携、⑥国内外の連携を意識して活動を行いました。

ESD Food プロジェクトが「食」とどまらず、地域の「風土」そのものにまで及び、地域連携への気運が、組織の風土変容を導くものにまで波及しています。

プロジェクト参加者：

対象学年：コアメンバー12名（3年生～4年生）

プロジェクトが実施された教科・科目など：

課外活動、国語、美術

学びのつながり

学校内での連携

教科間での連携：国語、美術、英語、社会、理科、道徳等

教科外での連携：プロジェクト内容を他の学年とも共有

学校外との連携：大学、NPO、生徒の保護者、地域（区長、住民）、大森第六中学校（東京都）、Gem International School（インド）



ESD Food プロジェクト活動ステップ

| | |
|-------------|--|
| 2015年 9月 | STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施 一生徒による学校紹介ビデオの制作 |
| 10月 | STEP1：持続可能な開発に関するワークショップを実施 ・ESD Food プロジェクトについて全校生徒にプレゼンテーション実施 ・コアメンバー自主運営による「第1回地域交流プログラム」実施 地域区長による講演『地域の過去・現在・未来』 京都大学阪本寧男名誉教授による講演『文化財としての作物～作物はどこから来たのか～』 STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査 ・専門家（阪本京都大学名誉教授）への訪問インタビュー実施 |

| | |
|--------------|---|
| 2015年 11月 | <p>STEP2：国際協働学習で取り組むテーマに関する調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NPOによる『水田の生物多様性』講演会実施 ・「種・土・食」や「地域の農業」に関する文献調査結果を文化祭で展示発表 <p>STEP3：コミュニティでのインタビュー調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回地域住民へのインタビュー調査分析：国語の授業の一環として実施（3年生全員参加）。 <p>STEP4：調査分析と問題の抽出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術の授業の一環として地域の過去・現在・未来を表現した「サステイナブルマップ」の制作開始 <p>STEP5：問題解決に向けてとるべき行動の明確化</p> <p>STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒による中間自己評価 |
| 12月 | <p>STEP6：STEP5の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大森第六中学校、Gem International School（インド）とテレビ会議 ・第2回地域住民へのインタビュー調査分析：国語の授業の一環として実施（4年生全員参加）。 |
| 2016年 1月 | <p>STEP7：一連の活動内容の他者への共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2回地域交流プログラム『日本文化を通じた交流の日』（全校生徒参加） ・道徳の授業の一環として、これまでの活動を通して得た情報を元に、地域の方々と協働したいことをアクションプランとして策定し、提案（3年生、4年生全員参加） ・ESD Food プロジェクトを通して地域に関心を持った生徒が自主的に地域行事に参加し、取材。 ・Gem International School（インド）とテレビ会議 <p>STEP8：HOPE 枠組みを活用した活動評価実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りワークショップの実施 |



地域の方をインタビューした内容は冊子にまとめて、ご自宅にお届けした

< ホールスクール・アプローチに向けた取り組み >

教員間での連携強化

- ・HOPE 枠組みにより、ホールスクールアプローチが実現し、教科連携を生み出すことができました。
- ・学年主任を中心に教職員プロジェクトチームを構成し、週に一回程度情報共有会議を実施しました。
- ・教員用メーリングリストを開設し、情報発信することにより、いつでも誰でもプロジェクトの進行状況や生徒の様子について知ることができるようにしました。



学校外との連携強化

- ・学校がある地域の区長からの全面的な支援、理解が得られました。
- ・ESD Food プロジェクトがきっかけとなり、学校と地域との対話が緊密に行われるようになり、地域・社会の課題について、生徒自らが学び考え行動する活動へと変化しつつあります。

< ESD Food プロジェクトを通しての変化 >

児童生徒の声

- ・（地域のために）自分たちがしたいことを一方的に押し付けてはいけないと感じました。地域の方が何を考え、何をしたいのか、先に相手の話を聴くことの大切さを知りました。

- ・地域との関わりを持つだけでなく、種と土といったテーマを持って、“発展的な”交流をしていきたいです。

教員の声

- ・教職員自らの地域への関心が随分と高まり、学校の教育活動の中に地域の課題や人々との関わりを取り入れようとする動きが感動や発見とともに生まれつつあります。
- ・それぞれの教員が専門性を生かし学校の教育活動に資する連携体制がとられるようになりました。

教員から見た児童生徒の変化

- ・これまでになかった学校内の変化に期待を寄せて、活気づいており、生徒の意見を学校運営に反映させていこうという気運が高まりつつあります。

< 今後に向けて >

- ・当初 ESD Food プロジェクトは学校内の一つの学習プログラムとして位置づけられていましたが、地域との連携が進んだことにより今後はさらに地域との連携を進め、生徒の地域への思いを形にしていって体制作りが学校全体で行われることになりました。
- ・生徒が主体となり ESD Food プロジェクトと SDGs（持続可能な開発目標）を掛け合わせたプロジェクトを学校全体で行う予定です。



column



学習者主体の学びとは --

バルト海プロジェクト国際会議に参加して

バルト海プロジェクトは東西冷戦終了間際の 1989 年に主に理科の先生方が中心となりバルト海を囲む 9 つの国で、バルト海沿岸地域環境改善を目的に始まりました。現在では 156 校が参加して、プロジェクトが実施されています。

ACCU 職員は 2015 年 6 月にエストニアの首都タリンで開催されたバルト海プロジェクト第 9 回国際会議に参加してきました。この会議には日本を含む 10 か国約 200 名が参加する大きなものでした。ホスト国であるエストニアのユネスコ国内委員会事務局でもあるタルトゥ環境教育センターが主催しているのですが、会議の準備にかかわったのはわずか 4 人。準備から当日の司会進行や、写真撮影担当、音響担当は 30 名の高校生ボランティアが行っていました。準備期間約半年の中で、face to face の打合せを行うほか、SNS を使ったコミュニケーションを密にとっていたと聞きました。主催団体の職員の話によると、ボランティア高校生たちに極力指示はださず、司会進行に関しても、大人は高校生が話したいことがまとまるまで、待ったそうです。会議はとても暖かく、楽しい雰囲気でしたが、大人も若者もみな学び合う場になっていました。

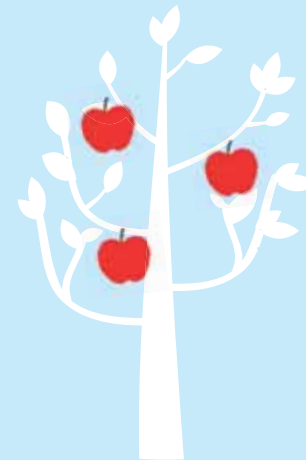
教育協力部 松尾奈緒子



ESD Food Project

第 3 章

ESDについて



持続可能な開発のための教育（ESD）について¹

ESDとDESD（国連・ESD（持続可能な開発のための教育）の10年）の沿革

ESDのコンセプトは、1992年に開催されたリオ会議として知られる、環境と開発に関する国際連合会議において、行動指針「アジェンダ21」が採択される中で、初めて合意されました。「アジェンダ21」の36章では、持続可能な開発に対する教育、訓練、意識啓発の重要性が強調されました。その後、持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグ、2002年）の勧告を基に、国連総会で10年間でESDに割り当てることが決定し、その結果、2002年にDESD（国連・持続可能な開発のための教育の10年）（2005～2014年）が宣言されました。ユネスコがDESDの主導機関に指名されました。

持続可能な開発とは？

持続可能な開発の概念は、1987年に国連環境と開発に関する世界委員会（WCED）が発表した、「我ら共有の未来（ブルントラント報告書）」によって広く普及しました。この報告書では、持続可能な開発を「将来世代のニーズを満たす力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすこと」と定義しています。ブルントラント報告書の主要な概念は「アジェンダ21」の起草に影響を与えました。

ESDの概念

ESDの概念と原理は国際実施計画（IIS）（UNESCO、2005年 in ACCU 2015）の中で紹介されています。IISは以下に挙げるESDの4大趣旨に基づいています。

ESDの4大趣旨

1. 質の高い基礎教育への参加、および継続を推進すること。
2. 持続可能性に取り組むため、現存の教育プログラムを見直すこと。
3. 持続可能性に対する人々への理解と意識を高めること。
4. すべての分野にわたって持続可能性を推進するトレーニングを提供すること。

ESDは、持続可能な開発に向けた社会の新たな方向付けに効果的に寄与できるように、教育の転換を促すことを目指しています。持続可能な開発に取り組む能力を学習者に与えるために、ESDには、批判的思考、将来の計画への想定、協調的な方法での意思決定などの参加型の教育と学習が求められます。ESDの概念は、どんな学習場所、例えばフォーマル教育、ノンフォーマル教育、インフォーマル教育、トレーニングなどにもあてはまりません（UNESCO、2014a in ACCU 2015）。

ESD Food プロジェクトにおいて、持続可能な開発の概念は、経済・環境・社会・文化の調和がとれた開発として紹介されました。ESDに関連するキーワードのひとつが「つながり」です。

ESDは社会的、環境的、経済的なつながりによってだけでなく、文化的なつながりによっても、達成されます。ESDを達成するためには、あらゆる人間の独自性の起源である文化的側面から始めることが非常に重要です。

1. Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), 2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners-. Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU). pp.10-12.

ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）

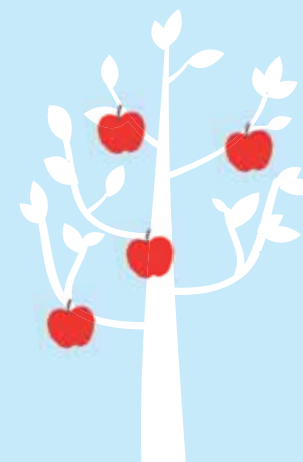
グローバル・アクション・プログラム（GAP）は、DESD 終了後の 2014 年以降に ESD の具体的な行動を起こし拡大させることを目的として、ユネスコによって始められました。GAP には 2 つの目的があります。第 1 には、持続可能な開発に貢献できるような知識・技術・価値観・態度を習得する機会をだれもが得ることができるように、教育・学習に新たな方向付けをすることです。

第 2 には、持続可能な開発を促進するすべてのアジェンダ・プログラム・活動において、教育・学習を強化することです（UNESCO、2005b in ACCU 2015）。GAP の主な役割は、DESD のビジョン、すなわち、「誰もが持続可能な未来のため、また、前向きな社会的変換のために必要となる価値観・行動・ライフスタイルを学び、教育の恩恵を受ける機会を持つ世界」を達成するために努力することです。「持続可能な開発を教育へ融合すること」と「教育を持続可能な開発へ融合すること」が ESD の発展を促進する 2 つのアプローチです。

ESD Food Project

第 4 章

ユネスコスクール事務局から



ユネスコスクール事務局にできること



ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は2008年から文部科学省からの委託を受け、日本のユネスコスクール事務局として国内外ユネスコスクールネットワーク強化・推進を行っています。

ユネスコスクール、ESDに関する情報発信を行っています。

ユネスコスクール公式ウェブサイト運営し、ESD優良実践事例、ESDの教材、ユネスコスクール、ESDに関する研修の情報等を発信しています。

※ユネスコスクールのロゴもダウンロード可能です。

ユネスコスクール公式ウェブサイト：

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>



国内外のユネスコスクールをつなぎます

ACCUは日本と世界の橋渡しとなるようなユネスコスクールの事務局として、質の高いユネスコスクール活動をサポートしています。

- 国内外の交流相手校をご紹介します

交流したいテーマ等をご連絡ください。日本国内はもとより、海外のユネスコスクールも斡旋します。

海外ユネスコスクールと交流をご希望の場合、こちらのページにアクセスしてください。

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/startexchange.j/>

- 国際協働学習プロジェクトを企画運営しています

アジア太平洋地域のユネスコスクールとともに、「お米」や「食」をテーマに持続可能な社会づくりの担い手を育むプロジェクトを行っています。学校のある地域の課題に児童生徒が主体となり取り組み、地域社会との連携をとりながら、変化の担い手として活躍するプロジェクトです。学びの経過や成果を学校内はもとより、地域の方々そして、海外の仲間にも共有します。教職員を対象に、ESDのコンセプト、プロジェクトの全体像について理解を深めてもらうワークショップも行っています。

教職員を対象とした交流会・研修会・ワークショップを実施しています。

海外からもESDの専門家を招へいしています。2015年度はイギリスの持続可能性と環境教育、SEEdから事務局長のアン・フィンレイソンさんを招き、ホールスクールアプローチについて、ネットワークを構築することについてのワークショップを開催しました。

ACCU職員を貴校に派遣します。

ESDについて、途上国での教育支援についてなど、ご要望をお聞きして、児童生徒、教職員を対象にしたワークショップ・講演を実施します。

お問合せ、ご提案、ご意見は以下までお願いします。

ユネスコスクール事務局：E-mail: webmaster@accu.or.jp

ESD推進のための ユネスコスクール宣言 (ユネスコスクール岡山宣言)

私たちにとってのESD

私と、あなた、学校のみならず、地域のみならず、世界のみならずへとつながっていく。
だから、私は、見えないあなたと励まし合い、支え合える存在であるという尊さに気づき、
何か行動したくなる。

教室から校庭へ、校庭から地域へ、地域から私の国へ、
私の国からあなたの国へ、そして世界へ、地球へ、私の世界は広がっていく。
だから、私は、どこ場所にもかけがえのない宝が息づいていることに気づき、
何か行動したくなる。

今と、過去とのつながり、明日とのつながり、遠い未来とのつながり。
今の私は過去や未来とつながっていく。

だから、私は、この大きな時間の流れのなかで、

たいせつな責任を負っていることに気づき、何か行動したくなる。

(児童の変容を児童の視点から叙述したユネスコスクール教員による「詩」にもとづく)

ESDのビジョンを取り入れることで、子どもたちの学びのなかに、さまざまなつながりが生まれます。他者、世界の多様性、いのちある地球、自然、科学・技術、文化、過去および未来などと自己とのつながりです。こうしたつながりのなかで、学びは深まり、子どもたちの心のなかに生き続け、持続可能な未来を創造する力となります。その力は行動と協働を呼びおこす力です。そして、問い続け学び続ける力です。

日本のユネスコスクールによる「国連ESDの10年」の成果

日本におけるユネスコスクールは、1953年に、ユネスコが世界の学校でその理念を実現する事業を開始した当初から日本の学校が参加して、今にいたります。日本では、学習指導要領や教育振興基本計画などに持続可能な社会の構築やESD推進の観点盛り込まれています。日本ユネスコ国内委員会「ESDの普及促進のためのユネスコ・スクール活用について（提言）」（2008年2月）によって、ユネスコスクールは、ESD推進の拠点として位置づけられました。ESDのビジョンと、ユネスコスクールの目的に共感した教師と学校を支援する人々や組織によって、ユネスコスクールは飛躍的に仲間を増やし、現在国内807校を数えます。全国のユネスコスクールによって、学校教育におけるESDの裾野は大きくひろがりました。「国連ESDの10年」を通して、ユネスコスクールでのESDには、多くの成果が見られるようになりました。

各ユネスコスクールのESD実践では、平和、環境、生物多様性、エネルギー、人権、国際理解、多文化共生、防災、文化遺産、地域学習などを入り口として、取り組むべき課題を、体験的・

探究的に発見し解決していくためのプロジェクトやカリキュラムが開発されました。各教科のなかだけでなく、総合的な学習の時間等を有効に活用しそれらを関連づけながら、ESDは実践されてきました。

地域の特徴を活かしたESD実践を通じて、子どもたちは、地域社会が人と人とが支えあって成り立っていることを深く理解し、地域の良さや抱える課題を知り、未来に伝えるべきこと、あるいは変革すべきことを地域の人々とともに考え、行動に移すことを学んできました。さらに、地域社会が抱える課題と、国やアジア、世界の課題とはつながっており、地理的な隔たり、世代や立場の違いを超えて協働することで持続可能な未来をつくることができるという認識が共有されつつあります。

子どもたちは、地域社会や世界のさまざまな課題を自らの問題ととらえ、協働的に学ぶなかで「生きる力」を育み、未来社会の担い手であるという意識をもつことができました。ESDによる体験を伴う理解と科学的な考察は、批判的な思考力と判断力、コミュニケーション能力を鍛え、自ら、また協働して、持続可能な未来をつくるための行動に役立つことが理解されました。

ESDのビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく子どもとともに学びながら、子ども中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになりました。社会に対する無関心、自己肯定感の低さが問題とされる日本の子どもたちの内なる力を発揮させ、自信の獲得につながりました。そして、学校間の交流によって、より深い学びが実現してきました。

さらに、学校と教育委員会、保護者や地域の人々、NGO/NPO、企業、大学、専門機関とのあいだに連携が深まり、ESD実践の質を高めてきました。また、世代を超えて学ぶことの喜びを確認することにつながりました。

2011年3月11日に起こった東日本大震災は甚大な被害をもたらしました。しかしESDが根づいていた学校や地域では、そのことが被災からの立ち直りに大きく貢献し、国内外のネットワークを通じて被災地に多くのあたたかい支援の手が差しのべられました。地域の再生と創造にむけてESDを基本理念とした創造的な復興にむけた教育が行われつつあります。

日本のユネスコスクール：私たちのコミットメント（誓い）

私たちは、日本の教育を変えていく原動力としてESDをこれからも進めていきます。

私たちは、持続可能な未来のために、身近な地域に貢献するとともに、グローバルな視点に立って行動する次世代を育みます。

私たちは、平和、環境、気候変動、生物多様性、国際理解、多文化共生、エネルギー、人権、ジェンダー、防災、文化遺産、地域学習、持続可能な生産と消費等、学びの入り口やテーマが何であれその先に地域、国、アジア、世界の平和と持続可能性を見据えて、地域の人々をはじめ多くの人たちと協働しながら、つながりを意識した教育を実現します。

私たちは、ESDの本質を理解するとともに、ESDの魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒

の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します。

私たちは、気候変動、生物多様性、防災、持続可能な生産と消費など、国境を越えたグローバルな課題について理解し、解決方法をさぐり、解決に向けてともに取り組んでいく国内外のユネスコスクール、特に近隣のアジア諸国のユネスコスクールとのテーマ学習・協働学習に取り組みます。

私たちは、互いに学びあい、活動の質を高めていくために自発的に組織されるユネスコスクール同士の全国ネットワークをつくります。そして、ユネスコスクール間の交流や協働を推進し情報交換・活用の仕組みを充実させます。

私たちは「変化の担い手」として子どもと教師を捉え、地域社会における持続可能性の実践者となるように努め、他の学校、社会教育・生涯学習機関、NGO / NPO、自治体など多様な主体とともに、持続可能な地域づくりに貢献します。

私たちは、さまざまな主体との対話と連携を通して、「国連ESDの10年」の後継プログラムである「ESDに関するグローバルアクションプログラム（GAP）」の5つの優先行動分野をつないでいきます。

私たちは、世界181の国にひろがるネットワークの一員として、ESDに取り組み、持続可能な未来をともに築いていくことを、そしてそのために、さまざまな交流と連携の機会をつくって学びあうことを、日本と世界のユネスコスクールに対して呼びかけます。

学校によるさらなるESD推進：ユネスコスクールからの提案

ESDの推進拠点としてのユネスコスクールの経験、成果と課題にもとづき、私たちのコミットメントをより良く実現するために、また、ESDをユネスコスクール以外の学校へ、地域へと持続的にひろげていくために、ユネスコスクールとすべての学校、その支援者に向けて、以下を提案します。

教師や子どもたちの主体的な発意やアイデアを尊重し、創造的な授業づくり、教科横断的で探究的な教育課程づくりによって学校全体でESDをすすめる。

ESDを通した子どもたちの学びの質や育ちを内発的に評価する方法など、ESDの成果をモニタリング・評価するための方法を検討し、共有する。

各学校のESDを持続的に支える政策や制度をつくり、また校長のリーダーシップがESDの特徴をいかした形で発揮できる基盤を整備する。

教師や教育関係者が自らの専門性を生かしながらローカル／グローバルな視野で持続可能性についての認識を深めるための研修制度を拡充させていく。

地域において、学校を含む多様な主体が持続可能な社会づくりに参加し連携・協働できる仕組みをつくる。

子どもたちはどの子も無限の可能性を秘めています。その可能性を輝かせることができるよう質の高い教育を行っていくことは、世界中すべての教師に共通する願いです。さらに子どもたちを見守る保護者や地域の人々の願いを共有し、平和で持続可能な未来をつくるために、ESDとともに推進していきましょう。

2014年11月8日

ユネスコスクール世界大会 - 第6回ユネスコスクール全国大会（岡山市） - 参加者により採択

ACCUの紹介

人をつなぎ、知をはぐくみ、未来をひらく

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は1971年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、アジア太平洋地域諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行っています。

ACCUのビジョン

ACCUはアジア太平洋地域において、誰もが平等に自らの意志で参加できる学びの基盤づくりを促進し、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献します。

活動分野

| 教育事業 | 国際交流事業 | 模擬国連事業 | 文化事業 |
|--------------------------------|-----------------------|---------------|-----------------|
| 国内外でのESD・EFA ¹ 普及促進 | 教職員のための国際交流（韓国、中国、タイ） | 高校生のための模擬国連事業 | 文化遺産保護 専門家育成 |

1. EFA：万人のための教育（Education for All）

Let's start a collaborative learning project

ESD Food Project



Introduction

We sincerely appreciate that you have picked up this book.

This book is a compilation of activities carried out for the “ESD Food Project”, an international collaborative project implemented as part of the FY 2015 Japan/UNESCO Partnership Project. During the ESD Food Project, students carried out their activities as “agents of change”, with the common theme of “food” in order to make their communities where their schools are located, their countries, and the whole world a more sustainable society. The project was implemented between September 2015 and the end of January 2016 with the participation of UNESCO Associated Schools or schools that are considering becoming UNESCO Associated Schools. There were seven schools from Japan and five schools from India that carried out activities as part of the project.

The ESD Food Project is not a project that aims to actually produce food but rather a project to create a sustainable society with the theme of “food”. During the project, children and students learned more about food as both learners as well as “agents of change”, not only with their classmates but also with people in the community and students at other UNESCO Associated Schools in other prefectures and countries overseas. One of the characteristics of this project was that students learned and took action both in their classes and through collaboration with their community and the other participating UNESCO Associated Schools in other prefectures and overseas countries. We hope that students could experience making decisions based on diverse values and share a wide range of cultures and thoughts by interacting and collaborating with them beyond specific areas of schools.

Although the term of the project was short; a total of five months, the participating schools decided on the topics they were interested in and carried out a variety of activities according to those topics. In compiling this book, we have made efforts to convey the meaning and the pleasure of collaborating and interacting with the communities as well as the domestic and overseas schools. This book introduces many specific examples to which schools can refer when expanding their circle of learning beyond the community and their country. The ESD Food Project is an international collaborative learning project that focuses on the promotion of exchanges not only with overseas schools but also among schools in one country. As the Secretariat Office of UNESCO Associated Schools, we would be happy if an opportunity could be provided through this book, to expand the circle of learning, from inside the classroom to outside the classroom, the school, and the community.

In conclusion, we would like to extend our appreciation to the teachers and children/students at all the schools that participated in the ESD Food Project, who shared their activities with us: Ms. Chiharu Kawakami, Director-General of the National Federation of UNESCO Associations in Japan and Mr. Yoshiyuki Nagata, Professor of Department of Education, Faculty of Liberal Arts at University of the Sacred Heart, Tokyo who provided instructions in this project; and Ms. Padma S. Iyer from the Centre for Environmental Education (CEE) in India who served as a coordinator.

Secretariat Office for ASPnet schools in Japan

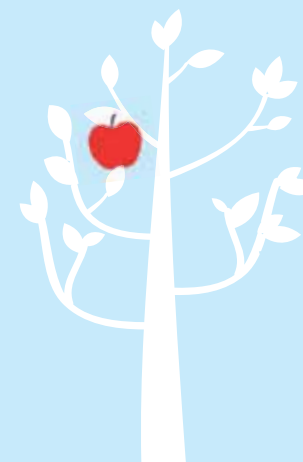
Let's start the collaborative learning project —ESD Food Project

| | |
|---|-----|
| Introduction..... | 66 |
| Chapter 1 | |
| ESD Food Project Outline..... | 69 |
| Chapter 2 | |
| ESD Food Project Good Practices | 79 |
| 「Food and Culture」 Local production for local consumption creates a sustainable society! | 80 |
| Onuki Elementary School | |
| The international collaborative learning project ①..... | 84 |
| 「Food and Economy」 Sustainability from the perspective of succession issues surrounding those engaged in agriculture... .. | 86 |
| Fukushima Prefectural Adachi High School | |
| 「Food and Economy」 Sustainable living and society in terms of food | 90 |
| Hiroshima Prefectural Yasufuruichi High School | |
| The international collaborative learning project ②..... | 94 |
| 「Food and Society」 GKA ESD x Food Project: An Initiative for Social Inequality | 96 |
| Gunma Kokusai Academy Junior High School | |
| 「Food and Environment」 Security of food and water..... | 100 |
| Kobe University Secondary School | |
| 「Food and Economy」 The past, present and future of traditional vegetables | 104 |
| Omori 6th Junior High School | |
| The international collaborative learning project ③..... | 108 |
| 「Food and Economy」 Focusing on seeds and soil —from food to climate— | 110 |
| MIHO Institute of Aesthetics | |
| Chapter 3 | |
| Education for Sustainable Development (ESD) | 117 |
| Chapter 4 | |
| From the Secretariat Office of UNESCO Associated Schools | 121 |

ESD Food Project

Chapter 1

ESD Food Project Outline



Introduction to the International Collaborative Learning Project implemented by ACCU

The Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) has implemented this international collaborative learning project since 2011 with UNESCO Associated Schools in the Asia-Pacific region. Taking the themes of “Rice” or “Food”, the project nurtures children and students as agents of change through collaboration between schools and the community in order to make those communities where the schools are located, the countries and the world, into a sustainable society.

Through international collaborative learning activities, the project aims to develop the abilities of its learners, covering areas such as problem solving, decision-making based on diverse values including an international perspective, as well as critical thinking, creative thinking and long-term thinking, through learning about the diverse range of cultures and thoughts around the world.

Objectives of the international collaborative learning project

Promoting international collaborative learning at UNESCO Associated Schools

Promoting interregional collaboration towards the promotion and dissemination of ESD

Nurturing youth as agents of change

Carrying out activities rooted in schools and the community

Conducting discussions so that any schools participating in the project can voluntarily and autonomously implement the collaborative learning project from the following fiscal year

ESD Food Project Introduction

In FY 2015, a Japan/UNESCO partnership project under the auspices of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology called the ESD Food Project was implemented in Japan and India with the theme of “Food”.

“Food” and the circumstances surrounding “Food” are productive themes of ESD allowing a variety of aspects to be examined, such as the economy, the environment, society, and culture, including biodiversity, climate change, food safety, consumption and traditional culture.

Introduction of schools participating in the project

India

| |
|--------------------------|
| Gem International School |
| Kuthuparamba High School |
| Navodaya Vidyalaya |
| CKNS GHSS Pilicode |
| Kendriya Vidyalaya |

Japan

| |
|--|
| Onuki Elementary School, Osaki City, Miyagi |
| Fukushima Prefectural Adachi High School |
| Gunma Kokusai Academy Secondary School |
| Omori 6th Junior High School, Ota City, Tokyo |
| Kobe University Secondary School |
| Miho Institute of Aesthetics |
| Hiroshima Prefectural Yasufuruichi High School |

Selection of Participating Schools

Schools in India were selected by CEE. Schools in Japan were selected by the project committee members. They kept in mind the “Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD”¹ to select the schools, focusing especially on the following six points:

1. Understanding of ESD and the project

Appropriate understanding of ESD as a school participating in the project.

There is an affinity between items emphasised in the project (children and students / teachers as agents of change) and the attitude of the participating school. (It is preferable that they understand the HOPE Framework².)

“Activity ideas” of the project are problem-solving learning activities.

2. Purpose of participation and expected achievement

Purpose of participation in the project and the plan leads to the “expected achievement” of the entire project.

3. Attitude towards the project

The entire school implements ESD.

In implementing this project, the understanding of the principal has been obtained and a cooperative structure with other teachers has been organised. (The project will not be implemented only by one teacher.)

4. Collaboration between the school and the community

Activities involving collaboration between the school and the community have been planned.

5. International exchange network

Are motivated to participate in the international exchange network.

Have specific ideas for participating in the international exchange network.

6. Communication in English and IT environment

To interact with schools in India, English language support has been established. (Teachers who speak English are supportive or support is provided from people in the community, etc.)

The minimum IT environment is maintained. (There are IT facilities and teachers providing support, etc.)

How the ESD Food Project was implemented

Holding a workshop for teachers in participating schools

A workshop on understanding the concept of ESD and an overview of the project was held in India and Japan (India in July, Japan in September). ACCU served as a facilitator.

<Determination of topics for schools and exchange schools>

Schools in India, where the workshop was held first, provided the food-related topics that they wanted to work on with the schools in Japan.

Topics provided by schools in India

Change in diet, genetically modified food and health, traditional agricultural methods, food additives, traditional food culture, food preservation, mass production and mass disposal, malnutrition

Based on this, schools in Japan also provided topics that they wanted to work on. Exchange schools were determined based on the categories of the schools and the topics.

| Theme | Food and economy | | Food and environment | Food and society | Food and culture |
|--------------------------------|--|--|---|---|---|
| Topic | Production | Food Production ⇒ Processing ⇒ Distribution ⇒ Consumption ⇒ Disposal | Safety of food and water | Food and disparity, and a change in diet | Food and disparity, and a change in diet |
| Specific topics | -Seeds (in-house seed production and purchased seeds) -Soil -Genetic modifications | -Decrease in number of youth engaging in agriculture -Mass production, mass consumption and mass disposal | -Change in global environment due to development (water shortages and water contamination) -Virtual water (food import → use of water) | -Natural disaster (disaster prevention) -Change in lifestyle | -Transitions and changes in diet -Ideal diet -Consciousness of local industry |
| Participating schools in Japan | Miho Institute of Aesthetics Omori 6th Junior High School, Ota City, Tokyo | Fukushima Prefectural Adachi High School Hiroshima Prefectural Yasufuruichi High School | -Virtual water (food import → use of water) | Gunma Kokusai Academy Secondary School | Onuki Elementary School, Osaki City, Miyagi |
| Participating schools in India | Gem International School, Kannur | Kuthuparamba High School | Navodaya Vidyalaya, Wayanad | CKNS GHSS Pilicode | Kendriya Vidyalaya, Kannur |

1 http://www.unesco-school.jp/?action=common_download_main&upload_id=7705

2 <http://www.accu.or.jp/esd/jp/hope/index.html>

How to implement the project at schools

By making use of its past experience, ACCU sorted the activities into eight steps to implement the international collaborative learning project. By solving regional issues with the diversified stakeholders in the region and sharing the process with participants from other regions and countries, the project aims to expand the visions of the participants. Schools participating in the ESD Food Project carried out activities in line with these steps.

<8 steps¹ in international collaborative learning>

STEP 1: Implement a workshop on sustainable development

Purpose: To engage students and develop their understanding in sustainable development

The workshop is led by teachers of participating schools and the project coordinator. The workshop provides the basis for conducting activities based on ESD principles.

During the project, teachers should remind students about the concepts of sustainable development.

STEP 2: Research themes for international collaborative learning (online and print resources)

Purpose: Develop participants' understanding of the theme

The students conduct research on topics for international collaborative

learning to gather information and develop further understanding.

STEP 3: Conduct interviews in the community

Purpose: Understand the local situation with respect to the topic of the international collaborative learning project

The students conduct surveys in their community on their chosen topic.

It may be good to prepare a worksheet or questionnaire to learn about regional and international differences when you have a video conference with other schools.

STEP 4: Analyze the survey results and extract a problem

Purpose: To identify a problem to be explored in the project

With the facilitation of the teacher(s), the students analyse data collected through their community surveys and identify problems that they think are important. Problems with a political overtone or those that may cause conflict within the community are avoided.

It is a good idea to share the students' analysis with community members. By sharing their information with other participating schools, students learn that even when they work on the same topic, other regions may face different problems.

¹ Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), 2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), pp.42-43.

STEP 5: Identify the actions to be taken towards solving the problem

The students think about what actions they can take in order to solve the problem they identified. With the facilitation of teachers and project coordinator, they develop a workable action plan for the school. The action plan should be one where various stakeholders (community members, students, teachers) can take part.

STEP 6: Implement Step 5

With the assistance of teachers, the students implement the action plan.

STEP 7: Share their activities with community members, parents, and students not involved in the project

Purpose: By learning about the students' activities, people who are not involved in the project can learn about sustainable development and community building. The students conduct surveys in their community on their chosen topic.

Students summarize the project activities and make a presentation to other students at their school, parents, and community members in order to get feedback. They can also have a discussion about the project activities. When sharing information with multiple schools, deciding on tools and rules beforehand will result in a fruitful.

STEP 8: Evaluation of the project using HOPE framework (self-evaluation by students and teachers)

Purpose: People involved in the project review how their thinking, knowledge, and actions have changed as a result of project implementation and exchange with other schools.

By using the HOPE framework, students evaluate all their learning activities. The teachers evaluate the learning process and how they have changed.

In each step, having a video conference with other schools will enrich the collaborative learning experience.

HOPE Framework

The HOPE Framework¹ is a teaching-learning framework for a sustainable future. It can serve as a guide to help education practitioners put ESD (Education for Sustainable Development) concepts into practice. This framework can help educators, NGO staff, consultants and researchers design, implement and evaluate ESD learning activities or projects. ACCU believes that the HOPE Framework can also contribute to achieving quality education for all, in formal, non-formal and informal education contexts. Furthermore, it is guided by the principles inclusiveness, equity and equality that recognizes education as a basic human right.

The HOPE Framework was developed by ACCU in 2008 as a tool for evaluating The ACCU-UNESCO Innovation Programme² conducted in the Asia-Pacific during the UN Decade of Education for Sustainable Development. It later on evolved into a teaching-learning framework that can improve the quality of education towards achieving a more sustainable society.

Elements of the HOPE Framework

Quality education that contributes to achieving a more sustainable society is...

HOLISTIC

OWNERSHIP-BASED

PARTICIPATORY in PARTNERSHIP

EMPOWERING

HOLISTIC

Holistic is about integration.

It acknowledges the need for better integration across the following dimensions:

- Environmental, social, economic, cultural and political dimensions
- Local and global dimensions
- Past, present and future
- 3Hs(Head, Heart and Hand) for a holistic development of a person
- Intergenerational learning
- Various methods for teaching and learning
- Lifelong learning

OWNERSHIP-BASED

Ownership-based is about co-creation.

Individuals, communities and institutions need to take ownership, responsibility and accountability for the content, process and resulting actions. It is about...

- A shared commitment and responsibility for the identification of the problem, the collection of the necessary information and proposing a solution among the stakeholders
- Being able to identify and generate the required resources(human, local and financial) by the stakeholders

PARTICIPATORY

Participatory is about genuine engagement.

It acknowledges the active role that individuals, communities and institutions play in learning for sustainable development. It involves...
Engaging learners and relevant stakeholders in deciding, designing, implementing, monitoring and evaluating learning initiatives
Recognising the knowledge and values of all relevant stakeholders in the teaching and learning process

In PARTNERSHIP

in Partnership is about learning to live and work together.

It acknowledges that the complexity of the issues faced requires joined up efforts to become a more sustainable society. These effort include...

- Cooperation, Coordination and Collaboration between/among different stakeholders
- Problem-solving that goes beyond traditional silos

EMPOWERING

Empowering is about transformation.

It acknowledges that achieving a sustainable society begins with learning to transform ourselves and our society. It recognizes the need to...

- Re-think our values, behavior and lifestyle
- Develop greater confidence to act towards achieving a sustainable and peaceful world
- Engage the youth as 'agents of change'

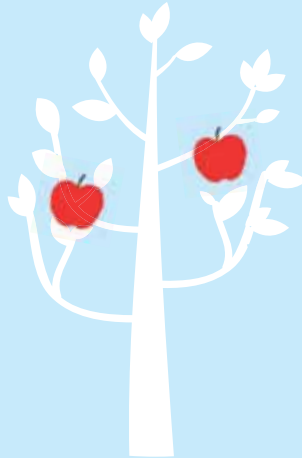
1 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU),2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners-, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), pp.58-59.

2 A programme implemented from 2006 to 2008 by ACCU. The objective was to initiate and support projects in the Asia-Pacific region to contribute to promote ESD.

ESD Food Project

Chapter 2

ESD Food Project
Good Practices



Food and Culture: Local production for local consumption creates a sustainable society!



Students experiencing organic rice farming

Outline of the school

Situated in the northern part of Miyagi, Onuki Elementary school is promoting the learning of "Furusato Onuki (our hometown Onuki)" through the four years from third to sixth grade. The school also participated in the ESD Rice Project, the predecessor of the ESD Food Project, and continues to have exchanges with elementary schools in Thailand and the Philippines.

School information

School representative: Masami Kikuchi
 Teachers in charge of the ESD Food Project: Hiroko Sato
 Address: 37-1, Aza-sakai, Tajiri-onuki, Osaki-shi, Miyagi
 TEL: 0229-39-0309 E-mail: osaki_oonuki@educ.osaki.miyagi.jp

Project contents

The project was conducted in the sixth-graders' class with the theme of "Look closely at the natural environment", during the Period for Integrated Studies. Children learned the importance of "local production for local consumption" through thinking about sustainable society from the perspective of the "place of food production". In Home Economics class, menus were planned with the theme of "Let's come up with enjoyable meals". The menus that the children created utilized what they learned during the Period for Integrated Studies, such as seasonal vegetables and ones they had harvested at home. Children shared their local traditional food and school meal

menus through exchanges with elementary schools in India and Thailand and learned about differences in the three countries.

Project participants

Target age group: 20 children in sixth-grade

Subjects for which the project was conducted

Period for Integrated Studies and Home Economics

Learning connection

- Cooperation with entities outside the school:
 - Non-profit organization (NPOs), Board of Education, Universities, parents or guardians, Adachi High School, Kendriya Vidyalaya Kannur (elementary school in India), Jirasartwitthaya School (elementary school in Thailand)

Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|---|
| Sep. 2015 | <p>STEP1: Workshop for sustainable development</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Conducted a workshop for teachers ● Set the direction of activities based on the theme (created a guidance plan) |
| Oct. | <p>STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning (including reference research and internet research)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Focused on sustainability from the perspective of places of food production |
| Nov. | <p>STEP4: Survey analysis and extraction of problems</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Thoughts on food materials revealed from survey outcomes ● Planned a menu in the Home Economics class ● Video conference with a school in India (introduced school life, seasonal vegetables, and school meals) |



| | |
|-----------|---|
| Dec. 2015 | <ul style="list-style-type: none"> Devised a way of introducing our school Video conference with a school in Thailand (introduced school life, daily meals, school meals, and special event meals) |
| Jan. 2016 | <p>STEP8: Evaluation of activities using the "HOPE" framework</p> <ul style="list-style-type: none"> Reviewed activities Cross-cultural experiences (exchange of traditional sweets between India and Japan) |

<Development of a "whole-school approach"¹>

●Strengthening of cooperation between teachers

- A training session for teachers was held to explain the ESD Food Project that the sixth-graders were working on and to strive for a common understanding.
- Participants of training sessions outside the school tried to provide the information they gained about the activities at ESD and UNESCO Associated schools to the other teachers.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- The two NPOs, which supported activities during the Period for Integrated Studies, delivered expert knowledge to the children by having preliminary detailed discussions about the aims of the NPO activities. It also has become customary to ask the NPO staff to act as an interpreter during exchanges with the schools overseas.
- "Volunteers to support Onuki Elementary School", organized by local community members, supported a variety of activities at the school in order to help the children's activities.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of teachers

- Keeping in mind the following two points better enables us to support investigative learning and the activities of children: to think from the perspectives of "environment/economy/society/culture", and to think in chronological order of "past/present/future".
- In addition to the Period for Integrated Studies, we have seen the proliferation and deepening of a range of efforts associated with other subjects.
- Working on international collaborative learning is becoming one of our school's outstanding features.

<Future efforts>

- Although sixth-graders have been working on international collaborative learning for now, it has been suggested that fifth-graders also participate in these activities in order to continue the exchanges. Measures that will enable this continuation are being considered in cooperation with the other teachers.

¹ "whole-school approach": ESD is about much more than preaching and teaching in a particular subject or by a particular educator. It is for educators and learners to integrate sustainability principles into their daily practice in their whole school and with their community as well. ESD Food Project executes this whole school approach.

Information sharing among participating schools

In the case of Onuki Elementary School, Kendriya Vidyalaya, Kannur (elementary school in India), and Jirasartwitthaya School (elementary school in Thailand):

Exchange among elementary schoolers began with their school introduction. Since the children from the school in India performed their native dance and song, the children of Onuki Elementary School in turn unexpectedly performed their native dance (*So-ran bushi*) and song (*Furusato*). Traditional sweets from both countries were also exchanged as a taste interchange to learn about differences in food between the two countries. On the theme of "food", we shared information about special event meals and our school meal menus with the children from the school in Thailand, with whom we interacted previously and continue to exchange.



After the video conference...

Comments from teachers at Onuki Elementary School

- The children devised a way to tell the partner school about what they learned and about their local community, and we could see development of the children's expressive abilities.
- During the video conference, children used to just give a presentation that was prepared in advance, but they came to enjoy the exchange itself including asking or answering questions on the spot.
- We needed a lot of effort to set up the video conference since we have a language barrier and different educational circumstances. However, we were also delighted to see the children smile and deepen their understanding of a different culture as well as their own country.
- The continuation of international collaborative learning facilitated a cross-cultural understanding, and enabled us to feel a bit easier about exchanges with schools overseas. The content of the exchange is important, however, the first step is to keep it up.
- We exchanged sweets with the school in India and ate them. I think this is an effective method where children can directly experience a different culture.

Comments from students

- When I saw the banana chips that the school in India gave us, I thought it would be sweet because it was banana, but actually it was salty. I am sure that the people of India who are eating *karinto*, a traditional snack food from Japan will be surprised, too.



Food and Economy: Sustainability from the perspective of succession issues surrounding those engaged in agriculture



Interviewed Mr. Motohiro Seki (Nanakusa Farm) who works on agricultural issues in Fukushima after the Great East Japan Earthquake

● Outline of the school

Adachi High School is the first school that joined ASPnet in Fukushima and is also the only high school member in Fukushima (as of February 2016). In Fukushima, agricultural and fishery industries have been enormously damaged by the diffusion of radioactive materials due to the accident at the Fukushima nuclear power plant after the Great East Japan Earthquake in March 2011. At Adachi High School, students as key agents of change work on cross-curricular education for restoration and international understanding to try and deal with this current major issue for which they have no clue as yet.

● School information

School representative: Nobutsune Sato
 Teachers in charge of the ESD Food Project: Takashi Chiba (Foreign Languages), Nobuya Ishii (Science)
 Address: 347 Kakunai-nichome, Nihonmatsu-shi, Fukushima
 TEL: 0243-22-0016 E-mail: adachi.h@pref.fukushima.lg.jp
 Website: <http://www.adachi-h.fks.ed.jp/>

● Project contents

Students learned about the factors involved in hindering sustainability that exist in the processes of production, processing, distribution, consumption, and disposal of "Fukushima food" through interviews with National Federation of Agricultural Cooperative Associations (JA) and research activities. They learned about the issue of "the number of people working in agriculture is decreasing" through a series of research activities. In order to think about measures for solving the issue, students

gathered information from many different angles by interviewing farmers who are working on agricultural issues in post-disaster Fukushima and conducting agriculture surveys, which were targeted at students whose schools participated in the ESD Food Project. Based on the gathered information, they completed a specific action plan to solve the succession issues of those in agriculture and are now preparing for its implementation.

● Project participants

Target age group: 9 voluntary members of first-year and second-year students

● Subjects for which the project was conducted

Extracurricular Activities, Home Economics


● Learning connection

- Cooperation within the school
 - Cooperation between subjects: Home Economics, Geography and History, and Informations
- Cooperation with entities outside the school:
 - National Federation of Agricultural Cooperative Association (JA) office, companies, public facilities, Yasufuruichi High School, Onuki Elementary School, and Kuthuparamba High School (India)



● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|---|
| Sep. 2015 | <ul style="list-style-type: none"> ● Selected the participants of the project and had a meeting to get to know each other |
| Oct. | <p>STEP1: Workshop for sustainable development</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Conducted a workshop called "Happy village 40 years later" <p>STEP2: Survey of the themes addressed during the ESD Food Project</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Conducted preliminary research studies utilizing references and the internet ● Conducted workshops at the school organized by theme <p>STEP3: Interview surveys in the community</p> <p>STEP4: Survey analysis and extraction of problems</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Fixed the theme. The places or persons to be interviewed and surveyed were examined based on the theme. ● Started sharing information with the school in India, and schools in other regions in Japan via Skype, E-mail and others |

| | | |
|-----------|---|--|
| Nov. 2015 | <p>STEP3: Interview survey in the community</p> <ul style="list-style-type: none"> Interview surveys with farmers, JA, companies and public facilities <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve problems</p> <ul style="list-style-type: none"> Conducted a workshop to investigate the current situation, analyze and identify the problems Searched for measures to solve the problems |  |
| Dec. | <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve the issues</p> <p>STEP6: Implementation of STEPS</p> <ul style="list-style-type: none"> Made Hypotheses, examined, and demonstrated the measures to solve the problems | |
| Jan. 2016 | <p>STEP7: Sharing a series of activities with local residents, parents or guardians and the students not involved in the project</p> <ul style="list-style-type: none"> Prepared materials for a content report Conducted a survey on agriculture <p>STEP8: Evaluation of activities using the "HOPE" framework</p> <ul style="list-style-type: none"> Evaluation of activities utilizing the framework of HOPE with self-analysis Topic setup for the next fiscal year | |

<Development of a "whole-school approach">

●Strengthening of cooperation between teachers

- With the help of the Home Economics teacher who had a connection with a local farmer, the students were able to interview the farmer.
- Made time to think about food issues by utilizing the newspaper during Home Economics.
- Had the Geography and History teachers accompany the students to their interview with the farmer so as to gain specialized knowledge.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the schools

- Gained knowledge and identified issues about local agriculture.
- Learned about the hardships and difficulties of continuous engagement in agriculture in Fukushima after the Great East Japan Earthquake as well as prospects for the future through visiting the farmers.
- Had the opportunity to get involved in local wine production through these activities. Also came up with the idea of making wine casks in cooperation

with the local woodworking industry.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of students

- Through researching one issue, I was able to think hard about what we had not paid attention to. I think this project led me to grow although I sometimes felt incompetent when I realized the difficulties in organizing discussions and thinking through the issues.
- The important thing is to share the information that I have learned. I would like to deliver it accurately when I give a presentation.

●Views of teachers

- Teachers and students were all learners in this project. It gave both the teachers and the students the opportunity to grow.
- Participation in the September workshop for teachers clarified how we should approach the students with the aim of sustainable development. I understood that it was important for us to not only guide students as a facilitator, but to also demonstrate an attitude of learning, working towards the solution of issues together.
- It was a good opportunity to look back and reconsider our teaching methods.

●Changes in students found by teachers

- The process, in which the students themselves decided the direction through research, thinking, and proposals, has created a sense of individual responsibility and the students demonstrated their attitude to work proactively on the project.
- The students, who used to have only a vague awareness of social issues, are now interested in specific news items including agricultural issues and domestic problems in India.

<Future efforts>

- From next fiscal year, we have decided to launch the UNESCO supporters club with the participants of this project as the core members, aiming to facilitate a continuous and long-term project.
- Along with "education for restoration" and "education for international understanding", the "ESD Food Project" has impressed people at the school as a new pillar of ESD and is expected to worked on continuously.

Food and Economy: Sustainable living and society in terms of food



Visit to a local supermarket to understand the manager's point of view

● Outline of the school

- Yasufuruichi High School celebrated its 40th anniversary in 2015. It joined the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet) in 2013 and was designated as a "Pursuit Core School", a pilot school under the Problem Discovery and Solution Program promoted by the Hiroshima prefectural government. The School engages in educational activities which develop students who are able to tackle the intractable issues of a modern society and identify problems for themselves, while making proposals and moving towards a solution in cooperation with other people.

● School information

- School representative: Kumi Funatsu
- Teachers in charge of the ESD Food Project
Jyou Tabai (Civics), Hiromi Tanaka (Home Economics), Futoshi Shincho (Foreign Languages)
- Address: 3-3-1 Bishamondai, Asaminami-ku, Hiroshima-shi, Hiroshima
TEL: 082-879-4511, E-mail: yasufuruichi-h@hiroshima-c.ed.jp
Website: <http://www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp/>

● Project contents

Students conducted research concerning mass production, mass consumption and mass disposal, and held interviews with retail managers. Through these activities, the students themselves noticed the issue of "food loss" and decided to start a project to tackle the issue. They submitted a questionnaire regarding the reasons for the food loss to retail managers. They found that many shop staff dispose of food that has an expired best-before date or use-by date, and other foodstuffs. In the future, they will clarify and carry out specific activities to solve the issue. Another aim is to develop the independence and competency of the students.

● Project participants

Targeted students: 46 second-year students who chose "Homemaking Studies"

● Subjects for which the project was conducted

Home Economics

● Learning connection

- Cooperation within the school
Coordination between subjects: Period for Integrated Studies, Home Economics, Information Literacy, Foreign Languages
- Cooperation with entities outside the school:
Local commercial facilities, Kuthuparamba High School (India), parents or guardians of students



● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|--|
| Sep. 2015 | <p>STEP1: Workshop for sustainable development (1) "What will education be like in 2040?" (2) "Let's draw a map where villagers could live happily."</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>It is necessary to have development that is well-balanced among economics, environment, ethics & religion, and society. The map above shows a village where the students thought that the villagers could live happily.</p> </div> </div> |
| Oct. | <p>STEP2: Investigate themes for students to pursue in the ESD Food Project</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Each student conducts research into "Food and Economy" individually |
| Nov. | <p>STEP3: Interview research in the community STEP4: Analyse research results and identify problems</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Interviews at various types of local commercial facilities A: Large-scale commercial facility (national chain) |

| | |
|-----------|--|
| Nov. 2015 | <p>B: Medium-sized commercial facility (Chugoku region) C: Local specialty shop (local consumption of locally produced goods) D: Small-sized shop (within a housing estate)</p> <ul style="list-style-type: none"> Start sharing information with the Indian school and with schools in other regions of Japan via Skype, email, etc. |
| Dec. | <p>STEP7: Share content of the activity with other people</p> <ul style="list-style-type: none"> Report progress of the ESD Food Project to the second-year junior high school students who came to the presentation held by the school |
| Jan. 2016 | <p>STEP5: Clarify actions to be taken to solve problems</p> <ul style="list-style-type: none"> Investigate reasons for “food disposal” and “food loss” to clarify the actions which will solve the problems <p>STEP8: Activity assessment using the ESD Framework of HOPE</p> <ul style="list-style-type: none"> Self-assessment |

<Development of a “whole-school approach”>

●Strengthening of cooperation between teachers

- Backed by the principal’s positive support, teachers made cross-curricular efforts to cope with the various problems that occurred during implementation of the project.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- The ESD Food Project made us interact with people in the local community, whereas previous educational activities had not.
- Interviews with the staff of local commercial facilities helped us clarify the problems concerned with “Food and Economy”. We now understand that learning at school or in the classroom is not enough to identify the issues; it is necessary to expand learning activities into the local communities.
- Interviews with local shop staff helped the students become more positive. Some students said that next time they would hold interviews from the preparation stage (arranging the appointment).
- During the presentation held by the school for the second-year junior high school students, the students themselves explained the ESD Food Project in an open home economics class.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of students

- I was able to learn how important it is to understand the root of the problem,

think about it, and find a solution through collaborative learning.

- I was able to understand what sustains our dietary lives by studying the food situation both inside and outside Japan.
- By interviewing working adults, I was able to clearly understand the current issues of Japan and broaden my perspective.
- Although it was difficult to tell the second-year junior high school students about collaborative learning, it was a good experience for me. I would like to tackle social problems proactively.

●Views of teachers

- Talking with a variety of different people is an effective way to identify problems. Just taking information from the Internet is not enough.
- We made a learning plan and an annual plan so that we could secure enough time to tackle the ESD Food project and carry out activities related to the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet) during the period for integrated studies.
- Various types of training were provided, especially for teachers in managerial positions so that collaborative learning could be promoted in each subject.

●Changes in students found by teachers

- Interviews with people in the community have stimulated the students to act independently.
- The students themselves explained the ESD Food Project to the second-year junior high school students who joined the presentation held by the school. In the course of preparing the explanation, students seemed to recognize again the significance of problem identification and of the Project itself.

<Future efforts>

●Views of teachers

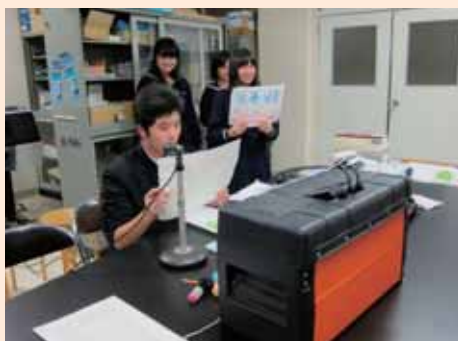
- In order to develop the ESD Food Project independently over the next year and beyond, the teachers in charge and the managers have started to study any possible obstacles to implementing the project or other future activities.
- Teachers are now improving the curriculum in order to promote their students’ independent-minded learning and studying how to best utilize the collaborative learning that they developed during the ESD Food Project.

Information sharing among participating schools

In the case of Adachi High School, Yasufuruichi High School, and Kuthuparamba High School (India):

Adachi High School and Yasufuruichi High School are both participating schools working on the same theme. They gave their self-introductions and shared the content of the projects that both schools are working on. The two schools then took part in an exchange with the school in India.

For the video conference with Kuthuparamba High School (India), Adachi High School researched the "production, processing, distribution, consumption, and disposal" for process of food with a focus on curry, whereas Yasufuruichi High School researched the curry culture in India. The two schools then took part in an exchange.



After the video conference...

Comments from teachers at Adachi High School

- Exchange with a country that has a different communication environment, using Skype within the limited period of the project was

not really good enough to understand each other. However, I cannot forget the sparkle in the eyes of the students at the moment that they were able to communicate with each other.

- We also asked people in India to answer a questionnaire regarding successors for those engaged in agriculture. We need to examine whether the people in India could understand the content of the questionnaire when filling it out. We have acquired a multi-dimensional and wider outlook through comparing Japan with India.

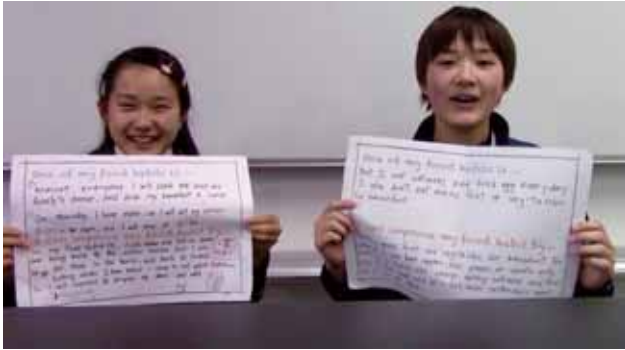
Comments from teachers at Yasufuruichi High School

- In spite of a few opportunities to exchange among schools, it was very refreshing and a new experience, and we would like to continue with it.
- During the exchange with the high school in India, communication did not go smoothly. However, seeing the students who tried to communicate with patience, I realized that the students had great expectations for this exchange even though they were nervous about communication in English.
- While each student utilized their individual English ability, they strived to tell something to the others and seriously tried to understand the conversation with others by writing English sentences down on paper. We have never seen this sort of attitude from the students in class.
- As an UNESCO Associated School, the exchange with Adachi High School, which is active in implementing ESD, enabled us to develop a deep understanding of the meaning of the ESD Food Project.



Gunma Kokusai Academy Junior High School

Food and Society: GKA ESD x Food Project: An Initiative for Social Inequality



● Outline of the school

The Gunma Kokusai Academy (GKA) is a private school combining elementary and secondary education from grades 1 through 12. One of the characteristics of this school is its English immersion program in which all classes except Japanese Language Arts and Social Studies classes are conducted in English. The ESD Food Project was also conducted in collaboration with international teachers.

● School information

School representative: Shizue Yoshida
 Teachers in charge of the ESD Food Project: Shinichiro Takamatsu (Science)
 Address: 1361-4 Uchigashimacho, Ota-shi, Gunma
 TEL: 0276-47-7711
 Website: <http://www.gka.ed.jp>

● Project contents

Students addressed the problem of social inequality from both local and global perspectives. They first examined inequality issues related to “food” in Japan and other countries, and then reviewed their own and their family’s dietary habits. Students then developed an improvement project for their dietary habits at home and have been engaged in activities according to their action plan. They have been addressing a global issue by exploring activities and methods that “only junior high school students can do”.

● Project participants

Target age group: 81 students in the seventh grade

● Subjects for which the project was conducted

Period for integrated studies

● Learning connection

■ Cooperation within the school

- Cooperation between subjects:
English Language Arts, Japanese Language Arts, Mathematics, Chemistry, Biology, World History, Art, Computer Technology and Home Economics
- Cooperation outside the academic curriculum: Library

■ Cooperation with entities outside the school:

Non-profit organization (NPOs), students’ parents or guardians, Government Higher Secondary School, Pilicode (India)

● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|---|
| Sep. 2015 | STEP1: Meeting of teachers who involve in the project |
| Oct. | STEP1: Workshop for sustainable development <ul style="list-style-type: none"> Let’s make a map of a village where the villagers can live a happy life! If the world were a village of 100 people STEP2: Survey of the themes addressed during the ESD Food Project <ul style="list-style-type: none"> A workshop: “Let’s review what we know about India!” Production of a video introducing the school to share information with the school in India |



Sharing the actual school video can make communication more realistic!

| | |
|-----------|--|
| Nov. 2015 | <p>STEP4: Survey analysis and extraction of problems</p> <ul style="list-style-type: none"> Review the “If the world were a village of 100 people” workshop A workshop on food and inequality in Japan and other countries Video conference with the Government Higher Secondary School (India) |
| Dec. | <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve problems STEP6: Implementation of STEP 5 STEP7: Sharing a series of activities with others</p> <ul style="list-style-type: none"> A workshop: “Let’s review dietary habits!” (for students and their parents) Planning and practicing of a project to improve dietary habits at home Preparation of a video about dietary habits and sharing it with the Government Higher Secondary School (India) Group project planning and background surveys on the issues |
| Jan. 2016 | <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve problems</p> <ul style="list-style-type: none"> Group project presentation Talk given by Keiko Yoneyama, Director at the NPO Food Bank Yamanashi |

<Development of a “whole-school approach”>

●Strengthening of cooperation between teachers

- The project was implemented by a team comprising of teachers with different areas of expertise*, of different nationalities** and from different generations.

* Expertise: English Language Arts, Japanese Language Arts, Mathematics, Chemistry, Biology, World History and Art

** Nationalities: Japanese, American, Canadian, Indian and Kenyan

- Teachers met often to share a common view of the concepts and meaning of the projects, and their implementation methods. To bring out on the uniqueness of each teacher, full details of the projects were left up to the individual ideas of the teachers in charge of the respective projects.
- It was decided that the ESD Food Project was decided to be introduced to the entire school as a case study of bottom-up educational activities which take advantage of the teachers’ initiative.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- An expert from an NPO working to resolve food problems provided professional advice on the student drafted projects.
- Understanding the actual situation and thoughts of the NPO expert gave the students a good opportunity to think about how their activities could be connected to the society.
- Projects drafted by the students to improve their dietary habits were implemented at home as homework during the winter break. As a result, some parents have been observed to have changed their ideas about diet.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of teachers

- Through the implementation of the project, school administrators have increased their interest in integrated studies using ESD and international collaborative learning.
- There have been more opportunities for teachers to use their ideas, which help them to become proactively involved in the project.

●Changes in students found by teachers

- Collaboration with an NPO has provided the students with a good opportunity to think about how their activities could be connected to the society. As a result, a kind of “exclusive feeling” was generated, which was different from how they felt about their other subjects or grades and increased the number of students who took an interest in the integrated studies.

<Future efforts>

- Teachers interested in ESD became core members and started taking the initiative at school.
- School administrators began to recognize the ESD Food Project as a model case to make integrated studies even more unique and meaningful. The school is now planning to share the project with other grades to discuss specific methods and theme settings.

Food and Environment: Security of food and water



Lunch time at the project site in Kerala, India

● Outline of the school

- Kobe University Secondary School offers combined junior and senior high school education, and aims to develop future-oriented people with a global perspective. To develop the interdisciplinary program jointly organized by Kobe University, which is called the “Kobe Model for Global Career Development (KMGC),” we design and offer problem-based learning activities during the Period for Integrated Studies from the perspective of ESD.

● School information

- School representative: Toshio Funaki
- Teachers in charge of the ESD food project: Motoaki Katsuyama (Vice Principal) and Rika Iwami (English)
- Address: 5-11-1 Sumiyoshiyamate, Hiagashinada-ku, Kobe-shi, Hyogo
- TEL: 078-811-0232 E-mail: kuss-secondary-admin@edu.kobe-u.ac.jp
- Website: <http://www.edu.kobe-u.ac.jp/kuss-top>

● Project contents

We have considered sustainability from the perspectives of food and water. We have studied the approaches of “virtual water*” and “local production for local consumption” while learning about inequity in food and water to understand the factors that hinder sustainability. We will hear from an outside expert who promotes “local production for local consumption” and also consider a menu which makes use of the “virtual water” and “local production for local consumption” approaches

to share the results both inside and outside Japan. In cooperation with parents or guardians, cooking practice will also be held based on the considered menu.

* Virtual water: Estimated water volume required in the case of imported products being produced in your own country

● Project participants

Target age group: The first year of high school (170 students)

● Subjects for which the project was conducted

English and Social Studies

● Learning Connection

- Cooperation within the school:
 - Special lessons in cooperation with the Social Studies teacher and the nutrition educator
- Cooperation with entities outside the school:
 - University, local companies and parents or guardians of students

● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|---|
| Sep. 2015 | Guidance on water issues in the world |
| Oct. | STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning <ul style="list-style-type: none"> ● Learning that water is a limited resource and learning about the water situation in different countries |
| Nov. | STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning <ul style="list-style-type: none"> ● Identifying usages of water in everyday life ● Understanding the importance of the supply of safe water |
| Dec. | STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning <ul style="list-style-type: none"> ● Learning about “virtual water” and Japanese international cooperation in the water sector |

| | |
|-----------|--|
| Jan. 2016 | <p>STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning</p> <p>STEP4: Survey analysis and identification of problems</p> <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve problems</p> <ul style="list-style-type: none"> Summarizing and making a presentation on what we can do for the water and food issues. |
|-----------|--|

<Development of a “whole-school approach”>

●Strengthening of cooperation between teachers

- We implemented the ESD Food Project mainly during English class but also had a special lesson in cooperation with the Social Studies teacher and the nutrition educator.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- We received guidance and assistance from Kobe University.
- With the cooperation of RCE Hyogo-Kobe, we were able to ask an expert of “local production for local consumption” to give a talk at the school.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of teachers

- With the system where the whole school is promoting ESD, then ESD, which had previously only been promoted by Social Studies, was promoted in an interdisciplinary way in cooperation with the teachers of other subjects through the ESD Food Project.

●Changes in students found by teachers

- Students increased their awareness of the issues and deepened their understanding of the issues. Each of them has become able to think about solutions and each student can deliver their opinions as a member of the global community.

<Future efforts>

- Through the ESD Food Project, we are going to strengthen our collaboration with local companies and the people who are active in the community, in cooperation with the university.



Food and Economy: The past, present and future of traditional vegetables



Vegetable-growing producer with some students, passing on his spirit to the future

● Outline of the school

- Supported by the four pillars of environmental education, international exchange education, disaster-preparedness education and peace education, Omori 6th Junior High School is striving to raise a generation who will support a sustainable society. Since we became a UNESCO Associated School, we have promoted ESD in coordination with the elementary, junior-high and high schools, universities, Boards of Education, companies and non-profit organization (NPOs) in the community in order to have our students developed by the whole community

● School information

- School representative: Hirofumi Matsuo
- Teachers in charge of the ESD Food Project: Hiroko Shibasaki (Science), Junki Shimizu (Social Studies)
- Address: 1-33-1 Minamisenzoku, Ota-ku, Tokyo
- TEL: 03-3726-7155 E-mail: om6-j03@educet01.plala.or.jp
- Website: <http://academic3.plala.or.jp/om6j/>

● Project contents

The Project was implemented as a way of handing down local people's wisdom and knowledge about food, which has been inherited through the ages, to the future generations by looking into the past and the present of the Magome Sanzun Carrot and the Magome Hanjiro Cucumber, both traditional vegetables in Ota-ku, Tokyo. The

students have extended their knowledge regarding traditional vegetables, learned the thoughts of those that produce them and considered the future of traditional vegetables from both a local perspective and a global perspective through examining documents, carrying out surveys on the recognition of traditional vegetables by issuing questionnaires on the street, and holding interviews with experts.

● Project participants

Target age group: 24 core members (first-year: 9, second-year: 6, third-year: 9)

● Subjects for which the project was conducted

Extracurricular Activities

● Learning connection

- Collaboration with entities outside the school:
 - NPO, Folk Museum, farmers, Agricultural Cooperative, MIHO Institute of Aesthetics, Gem International School (India)

● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|--|
| Sep. 2015 | STEP1: Workshop for sustainable development |
| Oct. | STEP1: Workshop for sustainable development <ul style="list-style-type: none"> First meeting: Let's illustrate an ideal society! |



| | |
|-----------|---|
| Nov. 2015 | <p>STEP3: Interview survey in the community STEP4: Survey analysis and identification of problems</p> <ul style="list-style-type: none"> • Interview farmers about traditional vegetables (learn the thoughts of the producers) • Interview people on the street (recognition of traditional vegetables, criteria when they select food)  |
| Dec. | <ul style="list-style-type: none"> • Video conference with MIHO Institute of Aesthetics, Gem International School (India) |
| Jan. 2016 | <ul style="list-style-type: none"> • Video conference with MIHO Institute of Aesthetics, Gem International School (India) |

<Development of a “whole-school approach”>

●Strengthening of cooperation between teachers

- We held video conferences with a school in India and the preparation involved a number of teachers, mainly the English teachers and Technology teachers. Having such opportunities on a regular basis made quite a few teachers including the supervisors understand the activities and opinions of students.

●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- Through the ESD Food Project, we were able to utilize our existing connections with the community and also build new partnerships with NPOs, experts at the museum and the producers of local vegetables.

- We gained great cooperation from the NPOs and the experts at the museum, who found out about the activities of the ESD Food Project. We will help to sell sweets made from traditional vegetables at a local festival.

<Changes through the ESD Food Project>

●Changes in teachers

- Through the ESD Food Project, an international exchange committee was initiated in order to handle international collaboration and guests.

●Changes in students found by teachers

- At first teachers were planning and giving instructions but then the students themselves investigated further what they had learned through the field work and made efforts to clearly explain the results to the students from Gem International School (India).
- The students themselves have discovered that it is important to draw producers closer to consumers as much as possible by learning about the past and the present of traditional vegetables while understanding the thoughts of producers.

<Future efforts>

- We are planning to make a presentation in front of the whole school, and to sell sweets made from traditional vegetables at a local festival in order to broaden the achievements of our activities.

Information sharing among participating schools

In the case of Omori 6th Junior High School (Tokyo), MIHO Institute of Aesthetics (Shiga), and Gem International School (India):

Both Omori 6th Junior High School and MIHO Institute of Aesthetics are participating schools in Japan, working on the same theme. They introduced themselves both in Japanese and English, and shared the projects they were working on via video conference. After examining the progress of the projects carried out at the respective schools, the Gem International School (India) joined the video conference.

After the video conference...

Comments from a teacher at MIHO Institute of Aesthetics

- The video conference provided students with an opportunity to open their eyes to the world, and expand their interests.



- The ties with schools in Japan and overseas developed via video conference help students to become more aware of what is going on in other parts of Japan and the world. Many students have expressed a desire to know more about projects carried out by other schools in Japan and overseas, and have a desire to learn to communicate more in English.



Food and Economy: Focusing on seeds and soil—from food to climate—



Students create a sustainable map of a community inspired by the “Rakuchu Rakugai-zu (views in and around Kyoto)” by Eitoku Kano.

● Outline of the school

MIHO Institute of Aesthetics is a boarding school located in a corner of a Satoyama, an area richly endowed with nature in the mountains of Shiga Prefecture. As of February 2016, the school, which was established in 2012, serves students up to the fourth year. “A desire for aesthetics” is the school motto and the students develop a “spirit of independence and cooperation” while practicing “prayer and appreciation” through daily harmonious work with their classmates. They also learn about “adapting to and respecting nature” through field work using natural farming methods.

● School information

School representative: Tamao Koyama
 Teachers in charge of the ESD Food Project:
 Tsutomu Komai (Senior Teacher), Hirokazu Fukui (Science)
 Address: 369 Shigarakicho Hata, Koka-shi, Shiga
 TEL: 0748-82-3435 E-mail: office-mb@mihobigaku.jp Website: http://www.mihobigaku.jp

● Project contents

Students were engaged in food production (land use) activities with the themes of “seeds and soil”. These activities were inspired by the daily school farm activities which use “natural farming methods” free from pesticides and fertilizers. With the whole-school approach in mind, the activities were conducted based on: (1) collaboration among students; (2) collaboration between students and teachers; (3) collaboration among teachers; (4) collaboration between students (the school) and the community; (5) collaboration among experts; and (6) domestic and international

collaboration.

The ESD Food project is not limited to “food production” but also includes an emphasis on regional “climate” with an increasing prominence given to regional collaboration to encourage a change in the organizational climate.

● Project participants

Target age group: 12 core members (third- and fourth-year students)

● Subjects for which the project was conducted

Extracurricular Activities

● Learning connection

■ Cooperation within the school

Cooperation between subjects: Japanese Language Arts, Art, English Language Arts, Social Studies, Science, Moral Education, etc.

Cooperation outside the academic curriculum: sharing the project content with those from other grades

■ Cooperation with entities outside the school:

Universities, non-profit organization (NPOs), students’ parents or guardians, the local community (community leader and the residents), Omori 6th Junior High School, Gem International School (India)



● Steps for the ESD Food Project

| | |
|-----------|---|
| Sep. 2015 | STEP1: Workshop for sustainable development – Students produce a school introduction video |
| Oct. | STEP1: Workshop for sustainable development <ul style="list-style-type: none"> • Presentation on the ESD Food project to the entire school • “First- community exchange program” organized by the core members <ul style="list-style-type: none"> Talk given by the council leader: “The past, the present and the future of the region” Talk given by Sadao Sakamoto, professor emeritus at Kyoto University: “Crops as cultural assets—where did they come from?” STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning <ul style="list-style-type: none"> • Face-to-face interview with an expert (Sadao Sakamoto, professor emeritus at Kyoto University) |

| | |
|------------------|--|
| <p>Nov. 2015</p> | <p>STEP2: Survey of the themes addressed during international collaborative learning</p> <ul style="list-style-type: none"> • Talk given by an NPO: “Biodiversity in paddy fields” • Exhibit and present research findings from literature on “seeds, soil and food” and “regional agriculture” at the school festival <p>STEP3: Interview survey in the community</p> <ul style="list-style-type: none"> • First survey analysis of the interviews with local residents: conducted as a part of the Japanese Language Arts class (all third-year students to participate) <p>STEP4: Survey analysis and extraction of problems</p> <ul style="list-style-type: none"> • Start to create a “sustainable map” representing the past, present and future of the region as a part of Art class. <p>STEP5: Clarification of actions to be taken to solve problems</p> <p>STEP8: Evaluation of activities using the “HOPE” framework</p> <ul style="list-style-type: none"> • Interim self-evaluation by students |
| <p>Dec.</p> | <p>STEP6: Implementation of STEPS</p> <ul style="list-style-type: none"> • Video conferences with Omori 6th Junior High School and Gem International School (India) • Second survey analysis of the interviews with local residents: Conducted as part of Japanese Language Arts class (all fourth-year students to participate) |
| <p>Jan. 2016</p> | <p>STEP7: Sharing a series of activities with local residents, parents or guardians and students not involved in the project</p> <ul style="list-style-type: none"> • Second community exchange program: the “Day of Exchange through Japanese Culture” (entire school to participate) • Formulate and propose an action plan for possible collaboration with local residents based on information gathered through the activities carried out up to this point. This is part of the Moral Education class. (all third- and fourth-year students to participate) • Participation in and coverage of local events by the students who took an interest in the community through the ESD Food project • Video conference with Gem International School (India) <p>STEP8: Evaluation of activities using the “HOPE” framework</p> <ul style="list-style-type: none"> • Workshop for review |



Interviews with local residents were compiled into a booklet which was then delivered to them.

<Development of a “whole-school approach”>

●Strengthening of cooperation between teachers

- Through using the HOPE framework, the whole-school approach was attained, leading to subject integration
- The teacher project team was formed, led by the head teachers from each grade and meetings were held about once a week to share information.
- Creating a teacher mailing list facilitated easier transmission of information, giving teachers easier access to project progress and students at any time.



●Strengthening of cooperation with entities outside of the school

- Full support and understanding were obtained from the council leader of the region in which the school is located.
- The ESD Food Project led to close dialogue between the school and the local community. This has helped students learn to be self-motivated when addressing challenges in the community and in society.

<Changes through the ESD Food Project>

●Views of students

- I have learned that we should not decide what we want to do (for the community) based on our own thinking. I have learned how important it is to listen first to what others are thinking and what they want to do.
- With the themes of “seeds and soil”, I want to make our exchanges with the community more “constructive” than just a mere exchange.

●Views of teachers

- Amazed by the many discoveries, the teachers' level of interest in the community has increased considerably and there have been moves among the teachers to incorporate community issues and exchanges with local people into the school's educational activities.
- A collaborative system has been established in which the teachers leverage their respective areas of expertise to contribute to the educational activities.

●Changes in students found by teachers

- Being excited about their expectations for new changes within the school, students are eager to incorporate their opinions into school management.

<Future efforts>

- Although the ESD Food Project was originally considered as only one of the learning programs at the school, as collaboration with the community grew, the school has decided to build a schoolwide system in which the students' passion for the community could be incorporated by promoting further collaboration with the community.
- The school is planning to implement a student-led schoolwide project by combining the ESD Food Project with SDGs (sustainable development goals).



column



Learner-centred learning -

After attending the international conference of the Baltic Sea Project

The Baltic Sea Project was launched mainly by science teachers in nine countries around the Baltic Sea in 1989, immediately before the end of the Cold War, for the purpose of improving the environment in Baltic Sea coastal areas. Currently, the project is implemented with the participation of 156 schools.

Staff members of ACCU attended the 9th International Conference of the Baltic Sea Project held in Tallinn, the capital of Estonia, in June 2015. The conference was attended by around 200 participants from 10 countries including Japan. The conference was organised by the Tartu Environmental Education Centre in Estonia, the host country, which is also the secretariat of the Estonian National Commission for UNESCO. Only four employees of the centre were engaged in the preparation of the conference, as preparations were mainly made by 30 high school student volunteers. They also served as hosts, photographers, and were responsible for the audio during the conference. I heard that the staff and the student volunteers had face-to-face meetings and maintained close communication through social networks for about six months during the preparation period. According to one of the staff member organisers, the staff tried to give as little instructions to the student volunteers as possible. In determining how to moderate the conference, they waited until the student volunteers decided what they wanted to talk about as hosts of the event. There was a warm and pleasant atmosphere in conference but it was also a good learning environment.

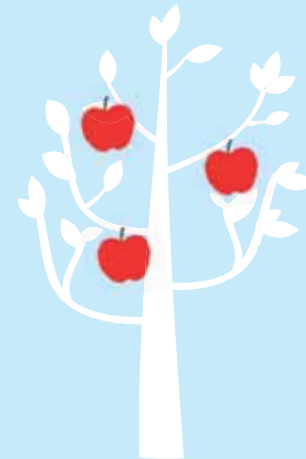
Naoko Matsuo
Programme Specialist
Education Cooperation Department



ESD Food Project

Chapter 3

Education for Sustainable
Development (ESD)



ESD (Education for Sustainable Development)¹

History of ESD and DESD

The concept of ESD was first agreed upon in 1992 at the United Nations Conference on Environment and Development, known as the Rio Conference, during which Agenda 21, a framework for action, was adopted. In chapter 36 of Agenda 21, the importance of education, training and public awareness for sustainable development was emphasized. Subsequently, based on a recommendation of the World Summit on Sustainable Development (Johannesburg, 2002), the United Nations General Assembly decided to assign a decade to ESD and thus the United Nations Decade of Education for Sustainable Development - DESD (2005-2014) was declared in 2002. UNESCO was appointed as the lead agency of DESD.

What is Sustainable Development?

The concept of sustainable development was disseminated with the publication of "Our Common Future", also known as the Brundtland Report, published in 1987 by the United Nations World Commission on Environment and Development (WCED). In the report, sustainable development was defined as "development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs." Key concepts of the Brundtland Report influenced the drafting of Agenda 21.

¹ Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), 2015. ESD Rice Project - Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion Through Rice 2013-2015 Good Practice and A Guide for Education Practitioners, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU). pp.10-12.

Concept of ESD

Concept and philosophy of ESD is introduced in International Implementation Scheme (IIS) (UNESCO, 2005 in ACCU 2015). The IIS was based on the four major thrusts of ESD as follows.

Four major thrusts of ESD:

1. Improving access and retention in quality basic education
2. Reorienting existing education programmes to address sustainability
3. Increasing public understanding and awareness of sustainability
4. Providing training to advance sustainability across all sectors

ESD aims at encouraging the transformation of education so that it is able to contribute effectively to the reorientation of societies towards sustainable development. ESD requires participatory teaching and learning methods such as critical thinking, imagining future scenarios and making decisions in a collaborative way in order to empower learners to take action for sustainable development. The concept of ESD applies in any learning places such as formal education, non-formal education, informal education and training (UNESCO, 2014a in ACCU 2015).

In the ESD Food Project, the concept of sustainable development was introduced as the harmonious development of economy, environment, society and culture.

One of the key words related to ESD is 'connectedness'. ESD will not only be achieved by social, environmental and economic connectedness but also by cultural connectedness. To achieve ESD, it is crucial to start from the cultural dimension where the identity of all human beings originates.

Global Action Programme (GAP) on ESD

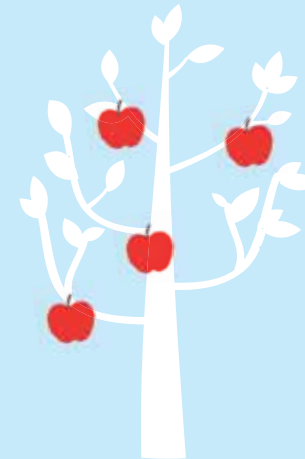
The Global Action Programme (GAP) was launched by UNESCO with an aim to generate and scale up concrete actions in ESD after 2014, when the DESD ended. There are two objectives of the GAP. Firstly, reorient education and learning so that everyone has the opportunity to acquire the knowledge, skills, values and attitudes that empower them to contribute to sustainable development.

Secondly, strengthen education and learning in all agendas, programmes and activities that promote sustainable development (UNESCO, 2015b in ACCU 2015). The main role of GAP is to strive to achieve the vision of DESD: “a world where everybody has the opportunity to benefit from education and learn the values, behavior and lifestyles required for a sustainable future and for positive societal transformation.” Integrating sustainable development into education and integrating education into sustainable development are two approaches that will promote ESD.

ESD Food Project

Chapter 4

From the Secretariat Office of
UNESCO Associated Schools



Activities that can be carried out by the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan

As the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan, the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) has strengthened and promoted the network of UNESCO Associated Schools in Japan and overseas since 2008, under the auspices of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

● We share information related to UNESCO Associated Schools and ESD

ACCU manages the official website of UNESCO Associated Schools and delivers information on UNESCO Associated Schools and ESD, including ESD best practices, educational materials for ESD and training.

● We connect UNESCO Associated Schools in Japan and overseas

As the Secretariat Office of ASPnet schools in Japan and a bridge between Japan and overseas countries, ACCU supports high-quality activities of UNESCO Associated Schools.

We introduce Japanese and overseas exchange schools

Please tell us about the theme of the exchange. We will then introduce UNESCO Associated Schools not only in Japan but also overseas.

If you wish to participate in an exchange with overseas UNESCO Associated Schools, go to the following website:

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/startexchange.e/>

We plan and manage the International Collaborative Learning Project

In cooperation with UNESCO Associated Schools in the Asia-Pacific region, ACCU conducts this project under the themes of "Rice" and "Food", with



the aim to develop leaders to create a sustainable society with the themes of "Rice" and "Food". In this project, children and students play active roles as change agent leaders in addressing issues that arise in the communities where the schools are located, through collaboration with those communities. The progress and achievements of the project are shared not only with the staff and students of the schools but also with people in the community and UNESCO Associated Schools overseas. We also hold a workshop to promote a better understanding of the ESD concepts and the project, targeting school staff.

● We hold exchange events, training and workshops for school staff

ACCU invites ESD experts from overseas. In fiscal 2015, we held a workshop on the whole school approach and network building by inviting Ms. Ann Finlayson, Executive Chair of Sustainability and Environmental Education (SEEd), from the UK.

● We dispatch ACCU staff to your school

Upon your request, ACCU holds workshops and lectures on ESD on themes such as providing educational support in developing countries., targeting children, students and school staff.

The official website of UNESCO ASPnet in Japan:

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/eng/>
E-mail: webmaster@accu.or.jp



Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD

What ESD means to us

*I am connected to you, to everyone at school, to everyone in the community,
an inclusive community, and to everyone in the world.*

*Therefore, even though you may be hidden from my view, recognizing the value of my role in
encouraging each other and supporting each other makes me want to do something.*

*My world extends from the classroom to the schoolyard, from the schoolyard to the community,
from the community to my country, from my country to your country,
and then further to the world and to the Planet.*

*Therefore, recognizing that precious living treasures are present everywhere,
makes me want to do something.*

*Connections with the past, with tomorrow and with the distant future.
Now, I am connected with the past and with the future.*

*Therefore, recognizing that I shoulder an important responsibility amid
this long passage of time, makes me want to do something.*

Based on a message from teachers describing their perceptions of student
transformation at an UNESCO Associated elementary School

Incorporating the ESD vision will lead to the creation of various connections within children's learning - connections between themselves and other people, as well as with the diversity of the world, the living earth, nature, science and technology, culture, the past and the future. Amid such connections, learning will deepen and survive in the hearts of children, and it will support the creation of a sustainable future. This support will be in the form of power to invoke action and collaboration, and the ability to continue inquiring and learning.

Outcomes of the UNESCO Associated Schools in Japan under the UN Decade of ESD

In 1953, UNESCO launched a programme to realize its ideals in schools around the world. Schools in Japan have participated in the programme from the outset. In Japan, the Course of Study (National Curriculum Standard) and the Basic Plan for the Promotion of Education incorporate the ideas of constructing a sustainable society and promoting ESD. UNESCO Associated Schools in Japan were positioned as bases for promoting ESD in accordance with the Proposal regarding the effective utilization of UNESCO Associated Schools for the promotion and dissemination of Education for Sustainable Development (ESD) (February 2008) by the Japanese National Commission for UNESCO. Through the ESD vision, and by virtue of teachers who empathize with the objectives of UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet), and of people and organizations that support the schools, UNESCO Associated Schools in Japan increased dramatically in number, to reach a current total of 807. Thanks to the UNESCO Associated Schools across Japan, the scope of ESD in school education broadened significantly. The UN Decade of ESD has led to many positive outcomes in ESD in UNESCO Associated Schools.

By implementing ESD in UNESCO Associated Schools, topics such as peace, the environment,

biodiversity, energy, human rights, international understanding, multicultural coexistence, disaster risk reduction, cultural heritage and regional studies were considered as entry points to learning. Projects and curricula were developed for identifying and resolving key issues in a hands-on, investigative manner. As well as in individual subject areas, ESD has been implemented by drawing connections between curriculum areas, effectively utilizing the Integrated Study Hours and other school activities.

Through implementing ESD that makes the most of the unique characteristics of a region, the children have gained a deeper understanding of how local communities are formed by people supporting each other. They have learned about the merits of communities and the issues they face. In addition, together with local people, they have considered what to hand down to future generations and what to reform, and they have learned about translating these ideas into action. ESD has also been leading to a shared understanding that the issues faced by local communities are linked to those at national, Asian and global levels and that joint efforts to overcome geographical distances and differences in generation and status enables us to create a sustainable future.

The children now view various local and global issues as their own. They have nurtured a "zest for living" while learning collaboratively, and they have developed an awareness that they are the future leaders of society. It is now realized that experiential learning and scientific investigation, through ESD, foster communication skills and critical thinking. They assist individuals in creating a sustainable future either individually or in collaboration with others.

A transformation occurred in the awareness of teachers guided by the ESD vision. Rather than merely communicating knowledge, teachers adopted an attitude of designing and coordinating child-centered study while learning together with their students. There were instances where this attitude changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community. It brought out the inner strength of those children in Japan who were regarded as being indifferent to society and as having low self-esteem. It let them to gain self-confidence. Exchanges between schools led to the realization of an even deeper level of learning.

Moreover, collaboration deepened between schools and boards of education, parents/guardians, local stakeholders, NGOs and NPOs, businesses, universities and specialized institutions, the quality of ESD in practice improved. It also led to confirmation of the joy of trans-generational learning.

The Great East Japan Earthquake of 11 March 2011 wrecked tremendous damage. However, in certain areas, ESD that had been embedded in schools and communities contributed significantly to the disaster recovery, with a great deal of compassionate support being extended to the affected areas through domestic and international networks. Education aimed at creative reconstruction and based on a philosophy of ESD is being conducted for the revitalization and re-creation of local areas.

UNESCO Associated Schools in Japan: Our commitment

We will commit to continuing the promotion of ESD as a driving force for transforming education in Japan.

We will:

Nurture the next generation who will contribute to their own community and to take actions with global viewpoint for creating a sustainable future.

Realize education with deeper awareness of interconnectedness in cooperation with members of the community and other stakeholders, no matter what approach to learning or the subject, in order to create a broader commitment to peace and sustainability in local communities, in Japan, in Asia, and in the world. Approaches to learning and subjects include peace, the environment, climate change, biodiversity, international understanding, multicultural coexistence, energy, human rights, gender, disaster risk reduction,

cultural heritage, regional studies and sustainable consumption and production. Illustrate transformation of students, teachers, schools and communities through ESD to spread the ESD vision, while understanding the essence of ESD.

Engage in thematic learning and collaborative learning together with UNESCO Associated Schools in Japan and overseas, especially those in neighboring Asian countries. Through such learning we will enhance understanding of, explore solutions and take actions for cross-border global issues such as climate change, biodiversity, disaster risk reduction and sustainable consumption and production.

Develop a national network, organized voluntarily, with fellow UNESCO Associated Schools in order to learn from each other and to raise the quality of activities. We will promote interaction and collaboration among UNESCO Associated Schools, and then enhance mechanisms for the exchange and use of information.

Strive to be a practitioner of sustainability in the local community to contribute to the development of sustainable communities together with other schools, non-formal and lifelong learning institutions, NGOs, NPOs, local governments and various other stakeholders, recognizing children and teachers as “agents of change.”

Continue dialogue and cooperation with various stakeholders to link together the five priority action areas in the Global Action Programme (GAP) on ESD, which is a follow-up to the UN Decade of ESD.

Encourage UNESCO Associated Schools in Japan and those in all the other countries, as members of a network spanning 181 countries worldwide, to cooperate in building a sustainable future and, in this context, to learn from each other by creating various opportunities for exchange and collaboration.

Proposal from UNESCO Associated Schools in Japan to further promotion of ESD by schools

Based on the outcomes and challenges of UNESCO Associated Schools in their capacity as bases for promoting ESD under the UN Decade of ESD, in order to fully realize our commitment and to steadily extend ESD to schools outside the network of UNESCO Associated Schools and to the wider community, we make the following proposals to all schools, including UNESCO Associated Schools, and to the supporters of those schools.

Respect the independent initiatives and ideas of teachers and students, and promote ESD across the whole school by developing creative lessons and by developing investigative and interdisciplinary curricula.

Consider and share ways for monitoring and evaluating ESD outcomes including methods for voluntarily evaluating children's development and quality of learning through ESD.

Build policies and systems that provide sustained support for ESD at each school, and arrange the foundation for the school principals to exercise their leadership while respecting the characteristics of ESD.

Expand the in-service training programmes for teachers and others involved in education to deepen their understanding of sustainability from a local/global perspective while making the best use of their expertise.

Create mechanisms in the community whereby various stakeholders can participate, cooperate and collaborate in the development of a sustainable society.

All children possess unlimited potential. Around the world teachers share an aspiration to provide quality education so that their potential can be realized. While sharing the same aspiration of parents/guardians and others in the community who nurture these children, we will promote ESD in order to create a peaceful and sustainable future.

8 November 2014

Adopted by participants at the 6th Japan's National UNESCO ASPnet Conference (Okayama, Japan) during the UNESCO ASPnet International ESD Events in conjunction of the UNESCO World Conference on ESD

(Provisional translation: Original Japanese)

Introduction to ACCU

Connecting people, cultivating knowledge and opening futures

The Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) was established in 1971 through the joint efforts of the Japanese government and private corporations, in particular the publishing industry. Since its establishment, ACCU has conducted programmes to develop human resources and encourage exchanges in education and culture among Asia-Pacific countries in cooperation with UNESCO and related organisations around the world, in line with UNESCO's philosophy that peace is constructed upon human knowledge and spiritual solidarity.

● Vision of ACCU

ACCU aims to contribute from the Asia-Pacific perspectives to the realisation of a peaceful and sustainable society where cultural diversity is duly respected, by means of promoting and securing lifelong learning opportunities where each and everyone can equally participate.

● Programme Areas

| Education | International Exchange | Global Classrooms | Culture |
|--|--|--|---|
| Promotion and dissemination of ESD and EFA ¹ at home and overseas | International exchange for school staff (Republic of Korea, China, Thailand) | Global classrooms for high school students | Development of cultural heritage protection experts |

¹ EFA: Education for All

協働学習プロジェクトをはじめよう －ESD Food プロジェクトの実践から

発行日 2016年3月10日
発 行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
162-8484東京都新宿区袋町6 日本出版会館
TEL : 03-3269-4435 FAX : 03-3269-4510
URL : <https://www.accu.or.jp>
E-mail : webmaster@accu.or.jp
翻訳・デザイン・印刷・製本 株式会社メディア総合研究所

©ユネスコ・アジア文化センター2016
ISBN978-4-946438-98-1
Printed in Japan
禁無断転載・複製

Published by the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)
6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484, JAPAN
Tel: +81-3-3269-4435
Fax: +81-3-3269-4510
URL: <https://www.accu.or.jp/jp/en>
E-mail: webmaster@accu.or.jp

Translated, designed and printed by Media Research, Inc.
© Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO 2016